古史傳

自第五十六段
至第五十九段

十二

歷和第三号

和書門
類 四二五一八
號 一三一
函 一一
架 四〇
冊

内閣文庫
和書
類 四二五一八
號
冊 四〇
函 一四
架 一六

内閣文庫
番號 和 42518
冊數 40(15)
函號 140 185

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

平篤胤謹撰　男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代中四上卷（カミヨノナカツキヨキーイフミキ）

六十五

於是天照大御神以爲怪亦聞
コヽニ　アマテラスオホミカミ　オモホシアヤシトオモヒコレ

看天兒屋根命出廣厚稱辭祈
メシアマノコヤネノミコトノヒロキアツキタヽヘゴトノミ

啓而詔曰。頃者人雖多請未有
ヒラキテノリタマハクコノゴロヒトモサハニマヲサズアラ

若此言出麗美也詔出而細開
天石屋戸而自内詔者因吾隱
坐而以爲天原自暗葦原中國
亦皆闇矣何由天宇受賣爲
樂亦八百萬神諸咲耶詔矣爾

天宇受賣益汝命而貴神坐出
故嘘樂遊也白矣如此言出間
天太玉命指出其鏡而示奉出
時天照大御神逾思奇而稍自
戸出而臨坐出時其隱立出天

手力男神引開其石戸取其御手而奉引出矣即中臣神忌部神以尻久米縄控度其御後方而白言従此以内勿還入坐矣是時以鏡入其石窟則觸戸而小瑕矣其瑕於今仍存此即伊勢崇祕出大神也

於是天兒屋根命と云を以て詔曰まで書紀石屋段第三一書ふ於是天兒屋命云々廣厚稱辭祈啓矣于時日神聞之曰頃者人雖多請未有若此言之麗美者也乃細開磐戸而窺之とあるを取て文を作せり○廣厚稱辭て比呂伎阿都伎多多閉碁登と訓べし常言はて廣く厚きといへど廣伎厚伎といふぞ古言のさはある多閉て師の水を湛ると同言ふて滿足ハ以意あり今世

れ言ふ。海淳の滿妃たまきはを。去本のあゝ子と云も同じと言れし如く。其神は御德を。彌廣爾彌高ふ言舉盡ひを云ふゆ。諸祝詞ふ。其奉る種々の物名を舉て。其事ふ仕奉ふ人の勞をさ子ふ。太じく言舉るも。本たその神を崇むをゆ起きるふて。稱辭竟と云ふ竟。まと下第五十九段。ふ。祓竟と云ふる竟も。稱盡し。祓盡さ意ふ。加茂翁說ふ。万葉ふ。月立春の來さらむかくしこそ。烏梅を折おゝ多努之岐乎倍米。ふを家持卿の追和し哥ふ。春裏之楽終者とを免る終も。共ふ楽みを盈ひことと有ゆ。ちてかく稱辭祈啓し給子ふた。何ふ對ひて。白し給へ子と云むふ。此たまは此時ふかく殊更ふ。神事麗美く。種く設備へて。嚴重ふ仕奉子給へふ。大御神ふ

獻子給子ゆと云ふも非ず。外ふ貴神御坐ひふ依て。其神ふ獻ゆ。稱辭も。其神ふ白し給子ふ狀ふゆ。門人ふる新田目道茂ゞ說ふ。御鏡ふ向て白給へる孔子と云子ふた。然る說ふ子。さるた此時ふ設備へて献らまさる物等の中ふ御鏡ハ。も令作日像之鏡とも有ふ如く。其大御光を学び移せる御鏡ふまむ有ゞ中ふも主と云ふる御物ふまバふり。故この御鏡ふ向きて。称辭白し給へふた。さも有べき御事ふり。此御鏡後ふ大御神の大神実とも。成坐せる物孔ふを思ひ合せ奉ふ法し。聞看た。上第四十二段。ふ出ふと子。頃者を。許能碁呂と訓法し。即本書ふかく訓ゆ。雖多請を。佐波邇麻袁世杼毋岁訓法し。此も本書の訓孔まふゆ。ふの大御言を思ふ。大御神の石屋戸を刺て。幽居せ法ふどを。神等孔。各く其くふ。出御孔ふと孔請啓せ

ふも多(サハ)有りしと知られさぷ。○未有(アラカ)若此言之麗美(クハしキハ)此師の訓ふをさぐへぷ。おゝの大御言は總てその意を按ふに我が石屋戸を刺て幽居(コモリヲ)るとゆ。神さちは出御はおとを請啓せるも多おきど。かく言のうるはしきは有らざぷしを。今兒屋命は祈(ニヽ)啓(ヲ)は言は。かく麗美(キ)は。いうれる貴き神は有てかく申はやらむと。其詞ふ甚(イタ)く感(メデ)ぬやしみ給へるおぷ。○細開而本曾米爾阿祁氏(ハホソメニアケテ)と訓べし。此米(メ)は所見(エ)の切りとる辭おぷ。拾遺集物名(おむぐくら)を隠して難波津は闇目ふのみぞ云くとを(を)る目も是ふ同じ。○自内詔者。本ふ内告者とゐるを師の此上ふ自字自字を補ひ告は私ふ替とるおり。師云。此は沼河比賣段ふ。未開戸(カダ)自(リ)内歌(ヒ)

曰(ハク)とゐるふ似ある文おぷ。内與理能理(ツチヨリノリ)給閉留波(タヘルハ)と訓べは。○自暗師云。おは自(オ)は自(オ)は。上の自我勝(ワレスヲ)云(ヒ)而。とゐる自(オ)ふ同じ。其意彼処ふいふ(ゐ)ゆ。下ふ自(オ)照明(リキ)矣。とゐる自も是おぷ。○皆闇は。美那久良祁(ミナクラケ)年と訓べし。古言おゆ。此祁年は加良年と云ふ同じ。例は古き哥ふいと多し。○以爲は淤母布袁(オモフヲ)と訓べし此袁は爾と云むゞ如し。○何由は。那杼(ナド)氏と訓べ。本ふは由下ふ以字はれぞ無ても聞ゆきは除き。○咲耶い。和良布(ワラフ)敘(ゾ)を訓ぢし。問言ふ敘と云こと。常ふも云へど。古言おぷ。此は怪みの餘ふ問給(ヒ)ふおぷ。○益は麻佐理(サリ)氏(テ)と訓べし。但し此は借字ふ。○嘘樂遊は。本は歡喜咲楽とゐるを師の歡喜咲の三字を恵良岐とゝみ。楽字を阿蘇夫と訓れるふ依り。嘘楽字は書紀ふ取り。遊字は私ふ加へて文を

作し嘘樂二字を惠良岐と訓み。即書紀ゐたゐ訓り。此も其本書はも惠良岐ゐど
ゐのゑゐむ字。此字を塡られしは遊字も常ゑ如く阿曾夫
て決免て古訓ゐるべくゐおぢ。
を訓ぢし。惠良具とも。師說ゐ咲榮樂むを云。續紀廿六大
詔ゐ。御酒乎。赤丹乃保仁。多末倍惠良伎云く。まと三十ゑ
詔ゐもかく見え。万葉十九ゐ。豐宴見為。今日者云く。千年
保伎保伎吉等餘毛之。惠良くく。ちて此も宇受賣命ゑ謀
尓。仕奉乎見之貴佐ゐどゐのゆ。
て申ゑ詞ゐて。己ゲ俳優を諸神の咲とを合せて。眞實ゐ
おもゐろく。樂みゐ技ぶさはゐ言ゐせはゐゆ。とゐのゑ。ゐ
記傳八卷見るべし。ちて惠良岐ゐ嘘樂。字を書れしも玉篇ゐ。嘘同
嚧大笑也とゐるゐ依て。此字を取ゐ。もゐも大笑ふ意
ゑみゐて。樂みの意ゐゑ故ゐ。樂字を合せて書れしゐる

ぢし。亦是ゐ就て按ゐ。神楽を加具良と訓むことも。もと
神惠良てふ言ゑ。加牟も加具をゆり。惠のはぶうり
とるゐ。其意を得て。神楽字を塡さるべし。牟も久の
濁音ゐうゐゑ。其具ゐ宇韻ゐれど。惠のもぶうるべき語
勢ゐるをくく。ちて惠良の惠も咲の惠と同く。
思ひ辨ふべし。
れゐ。まと笑の和良も。惠良と同言ゐて。万葉歌ゐ。保伎吉
ゑ。
等餘毛之惠良惠良爾。ゐぢゐのゐを思ふ。本も咲ふ狀を
ゑ。出とる言ゐる。ぢし。世ゐも惠良くく笑ふゐど云免ゑ。
まとけらく笑ふと云も。この轉れるゐり。まとへら笑
ゐども云り。出羽の秋田ゐどゐて。さはがう事して。甚く
笑ふを。へらゑはと云。此も
同言の訛ゐるゐはべし。
と。ゐ八咫鏡ゐり。○示奉は。師云。美世麻都流と訓べし。顯
宗紀。孝德紀。ゐどゐ。奉示とゐのゑ。神武。神功。仁德ゐどの卷
ゐも。示字を。美須ゐ訓り。

ちて汝れ御鏡を見せ奉まるからふ。日神の御光う抑ゼ
て。全等同く照かゞやくを以て。汝命ゑ勝りて貴神とた。
即此御鏡を申あせるもれあゼ。如此為るた、いと浅たゝ
の意あり。後世のあ、乃ざゝし知心を以て。疑ふあと勿れ。
きて此御鏡た。日像鏡と申て。日神の御像を摸し。はと其
御光のうあまるを以て言あれむ。汝命と。等しき神とこ
そ申べ知ゑ。勝て貴と云るハ。甚しく云いあせるもの
ゼ。かれ日蔭蘰を去ゑるも。上ゑ此鬘を。頭とり垂ゆくた。
る料ありと云ること。日光の乃たもきを。さし隔抑た
此ゑ思ひ合べし。雖を鳴せとるも。皆此貴神坐て世
を照し給ふと。日神ゑ同ゑをし玉。示しゑるもれあゆ。
纂疏の説あ。○逾思奇而とた師云。此御鏡れ。已命と等く
ど。非言れり。
照明々きを御覽して實ゑ宇受賣れ申せる如く貴神坐

ゼたとを。奇み御思あゼ。上ゑ怪み以爲せるを承て。逾
ゼた云あゼ。○稍た。師説ゑ今世の言ゑ。漸くゑ。少の意ゑ
見べし。稍と少。とた語。と云意あり。と云ゼれど。
加く不又乃曾の意通へり。○臨坐之時師説ゑ。臨た字鏡ゑ。闚を宇
ゼと如る。能曾久と同じ。今思ゑた。能曾年と。能曾久
とた。意異あるゞ如くあれゼ。中務家集ゑ。池ての岩き為
ゑ松ゑ藤かゝゼ。源氏椎本巻ゑも。水ゑれゼ知
る廊ゑ云くあゼ。此らた臨を能曾久と云。今は能
曾伎坐を。臨坐とゼゼ。相通ひて本同言あゆ。但し此た。
とゼゼ。物の間あどとり闚とた少異ゑ自戸出而
て。為ゝ事の情状をうかゝひ見る意あり。とゼゼ。ちて上
ゑ稍從戸出而とゼる故ゑ。石屋戸れ外ゑ。出御るゞと聞

もまども然らば。細開ある間を。稍御體を出して。臨坐
ふとしあり。下文に奉引出とあるを以て。思ひ辨ふべし。
戸外に出御るあらむまに。奉引出とも有ま
じくこそ。故稍は少の意ありと。上に云りき。○引開其石
戸は。本に此文なし。今書紀古語拾遺共に。天手力雄神。
侍磐戸側。則引開之者。とあるに依て補す。必有べ
き文なり。かの細開給へゆし石戸を。皆ゞら引開とる由あり。
ゆゑ。爲年とて。形も。御戸掖に隱立し。ゆゑ。世は此時石戸
を投給ふるゞ。信濃國に落て山と化れる。そき戸隱山あ
りと言傳ふゆゑに。美濃國喪山あゞの故事を思ふに。然も
有べくおぼえとり。春日社記に。天手力雄神。信濃國戸隱
明神是也。と有に。傳へたる事ふやゝまと信濃國地名考にも。
古說を引て。戸隱神社に。手力男神ある由云りき。ちて戸隱
に。トガクリと訓べきを。訛りて。トガクシと言ひ。ふらへ
るに。
○取其御手而は師云。此取字を。舊く多麻波理と訓

ひ。書紀に。奉承と書る。其をも然訓り。ちれど此訓に。後世の語ぶるゆゑ。
ば。猶字の隨ふ。登理氏と訓ばし。○奉引出矣。本に引出とのみあり。
今は書紀に。引而奉出とあるに依て。奉字を補へり。師說ふ。此ろて。此神に名義あり
らはまゝあり。戸城引開むふに。本をゆゑに。御手を取て
引出し奉ふも。手力の優とらむ神を。充ばきわざゆゑ
かし。延喜六年日本紀竟宴。阿刀春海。哥に。止已也美母多
乃之支美与止奈利介留波安女多知加良乎多須介
安利介利。とあり。ちて此神かく石戸を引開ゑ乃へゑふ依て。
亦名を天石戸別命。まと天石都倭居命と書り。まと明日名門命とも
申ばゆゑり。あゝ次段に注ふを見るべし。○中臣神とも天兒屋命を
申し。忌部神とも天太玉命を申せり。古事記に。布刀玉命とも。みあきど。縄

を引こと也。必二人してものべき事故よ。書紀を取きり。○尻久米繩也。師説ふ。今いふ志米繩ふ也。約むれば。おのおのら理久い曙て。志米と言ふ。然らば尻久米と物也一ッよて名也別ふる。又思よ。志米也標結ふどの意ら。然らば尻久米と物也一ッよて名也別ふる。但し標も本也。この尻久米とり出とる事ふや。然らば活用て志牟とも云也。や〜後のことら。　土佐日記ふ。おへのかどれ去ひくまふはとあひ。尻也藁の本をいひ。久米也許米ふて。許毋理を久美と云ること也。師の冠辞考。さに竹の條よ委く見也。然れば其藁の尻例よて。許米をも久米と云べきこと疑ひふし。許米とも枕冊子よ。牟久呂許を斷去ばて。されぞら許米置とる繩ふゆ。許米とも枕冊子よ。牟久呂許米ふぞふる許米よて。俗は某具留米と云是ふり。具字の意ふ近し。今云。谷川氏も既く。尻指藁本。俱梅竜之也といふゆ。書紀よ。端出之繩と作て。此云。斯梨俱梅儺波。此下よ。示云。左繩と。ふる四字也。後人の也加、とるふふべし。也有ふて知ばし。端出とも也。斷ざる藁

也尻の出ふる由よて。即後世の志米繩の狀ふ也。此繩よもくさぐさ理を云説ふのきど。みふ例れひゞふと也り。和名抄ふ。顔氏家訓也。注連字を挙て。之利久倍奈波也云。きどとく當れりとも所思ば。まと加茂大人説ふ也尻也後方也意久米也限目ふて。今天照大御神の御後方ゝ引也とふる。限目の繩ふ注意ふゆ。とふるも然ふとも也ゆ。孰ふらむ決也巨しとあ也。されど篤胤也師説ふ從べくおぼゆ。　ちて此を亦。日御綱とも云ふ。其也次段よ見え為也。○御後方也。師云。美斯理幣也訓可し。齊明紀ふ後方を斯梨敝と訓る例あり。万葉二十よも等能〻志利弊ふ也。即目方ふ對とる名よて。尻方の意ふゆ。○控度師云。如此爲し所由也。次也語ふて知らる。後世ふ神事よ引亘ばも同意よて。隔

をあせるれど。○勿還入坐矣た。本ゐ不レ得レ還レ入レと有を。其た物遠あまぢ。更ゑ訓ハ師訓ふ那加幣理伊理麻志曾と訓ばし。○是時以鏡入其隨へり。石窟則。是ゝり大神也まで。書紀を取て文を作れ。ゑの鏡た。彼八咫鏡を云さて大御神れ出坐る御石のと牙。此御鏡を入ゐるゑとた。深き所由石のることゑ有可し。○觸戸而た。石屋ゑ入ゐ〳〵とて。戸ゑ衝觸と有由れゆ。此た大御神を引出奉ゐて。復還入坐むゑとを恐き思ひて。尻久米繩を引亘しゑど。石のはゐ〳〵ゑく爲れるま〳〵ゑ。過ゐて戸ゑ突當るゑや有らむ。○小瑕矣。ゑた師のイサヽカキズツキヌ。ゆ訓れしよ依とれど。少う更ゑて。須許斯伎受都祁理と訓ばし。瑕た字書ゑ。王の疵をいふとし見えとり。石戸ゑ觸ゐら

むゑた。瑕付こと有ばきゑ。此を以ても。大御神のゑも有しことを知べき物ゑり。ゐらゝ屋た。実ゑ石屋ゑて。ふきとるむゝりゑて。瑕れゑくゑとた有まじくゑそ。但し此た。過りて爲れる事ゑた石のきぞ。幽契石のる事とぞ思はる〳〵。其た始ゑ大御神。齋服屋ゑ御坐て。神衣を織ゐ給牙有時ゑ。須佐之男命。その屋棟を穿て。天斑馬を墮入とはひしゝゞ。大御神見畏まして。梭を以て大御身を傷ひ給牙るを思ふゑ。此御鏡ゑ瑕付るゑとた。彼由緣ゑとる事ゑて。末終ゑ御靈實とゑり給牙有御鏡ゑる故ゑ。かくまで幽き因緣の具れるゑた非じゝと想像奉らき爲ゐ。石のれのしゑ。○其瑕於今仍存ゑの事ハ。既ゑ上ゑ云りき。

第四十五段ハ三面の神鏡の事を取總て云へる処披見るべし。○此即伊勢崇祕之大神也。その事も上第四十五段ハ既ク注ヘ已。その委き事ハ第百三十四段まと垂仁天皇巻二十五年の処ハ云ふを見るべし。

於是天照大御神。遷坐其新宮。天兒屋根命。天太玉命。廻懸日出御綱而。令大宮能賣命。亦云大宮比賣命。亦名天宇受賣命。亦名宮比神。亦名矢出波波伎神。侍其御前。今世内侍。以善言美悅懌宸襟也。令天石戸別命。亦名櫛石窓命。守衛其殿門而。天太玉命。大殿祭御門祭供奉矣。故天

宇受賣命者。御巫。猿女君等出祖也。次天石門別神。此神者。御門出神也。亦名謂阿居太都命。亦名天背男命。此者犬養縣犬養連。宮部造。今木連。巨椋連。大椋置始連等出祖也。

其新宮とは。手置帆負命。日子狹知命を造立とる。かの御殿なり。日之御綱を。本書に。今斯利久迷縄是也といひ。是也の間に。日影之像の四字ありを。今は畧て引ぬ。其師説に。これ附會の説なり。藁の尻を出ぬるを以て。如此さまに言なせる。更に上代を意とすれば。と有なり。然れど。尻久米縄の一名なれ。那波てふ言を。口訣に直なりと云り。此は漢籍家語に。木受縄則直。などいひるに依る説なり。と聞もれど。万葉に。飛彈人のうち墨縄の。と直きことを譬へるなぞを思ふに。然も有らむも知べからず。まと那比ふてもあるべし。〇廻懸を。今もいふる如く。宮の四方に懸廻らしなり。上の控度は。あど石屋の戸に。ひみ引亘せる由なり。

控度と懸廻て語ふこのけて石屋戸ふ繩を引亘とはて。差ふの卍思混ふべらばば大御神の還入坐むおとを思ひておはる。此新宮ふ引廻ある。禍神ハ入來て。まとも禍事せむこと殘恐きてふ卍。其ハ下ふ引る祝詞文の後世ふも神事のをゆ。尻久米意を尋て思ひ辨べし。

繩を引廻らばおとて。卽此意ふゆ。或説ふ今雖曠野中強暴民視亘一繩而莫漫加足者豈非神化之深乎。読者宜致思焉と云るて然る言ふり。けて此繩ハ狀て。書紀口訣ふ。麤藁左糾出端といひ。纂疏ふ端出者。綯索而不整雪其芒端ふぞ有るまて。今も爲る玉ふ繩の狀ふること知ばし。外ふこの外ふ諸書ふ云る。○大宮能賣命。宮比神。矢説ども有るまど。皆非ふ卍。

之波〻伎神。御名の義下ふ云ばし。○令侍其御前。御前て。

大御神の御前ふふゆ。侍て師説ふ。佐毋良布と訓ばし。佐て眞ハ意毋良布ハ毋流を延とる言ふて。毋流ぞて何事ふまれ心を於ハて伺ひ居るを云。於ハふ物を守ると云も。又人目をもふ流ふぞ云女此意ふり。又目を於れて。物をおく〻と見るを。まもると云も此意ふ卍又候風ふど云も。泊舟のとき風ま待伺ひ居るを云て。同意ふり。されど仰せ賜ふ事ふぞ有らず奉らむと伺ひ居る意ふて。凡て君の御前ふ在る。佐毋良布と云ふ卍。垂仁卷ふ。木實持參上而侍。履仲卷ふ既平訖參上而侍。万葉二ふ。雖侍候佐毋良比不得氐。二十ふ。佐毛良布等。和我乎流等伎爾ふどの卍。けて此をり轉ゆて。後ふハ侍まと侍ふ処を指ても侍と云ひ。ひ居る人を指ても侍といひを云をゆ轉りて。ふぞ對ふ人を敬ひて云。語ふも己ゲう

ヲの事なれ。凡て添言ことゝあきめ。譬へば見るを見侍ふ聞を聞侍ふと云ふ如し。さて此言も。もと佐毋良布あ保を。中昔をりて佐年良布といひ。又かの添て云辞の侍ふ字ぞ。訛て佐宇良布と云ひ。又約て曾呂と云ひ。佐年良布といふを俗し。さて又波年倍理と云言なり。波倍理とも云めり。佐毋良布と。全く同じさまに用ひ。もとゝめ言の意も甚近し。故同く侍字を書あり。但昔ゝめ佐毋良布は。侍字をのみ書て。侍字をも。候字をも書。波年倍理は。あゞ貴人に御前に在字を書ことあり。こゝ波年倍理のみおて。伺ふ意もあき故ふやならむ。さて続紀宣る意のみおて。伺ふ意もあき故ふやならむ。さて続紀宣命あどるも。侍と云ことゝ多し。皆佐毋良布と訓ても。波閉理と訓てもをろし。○今云。此師説も。記傳十四巻に。大国主神の八十坰手隠而侍と申給へる処に記されとるあるを。此はとりて注せり。あ布波倍流てふ言のもとれ意をも。委曲に解れとるを。此はもて洩しつ。本書に就て見べし。さ云れしはて。此神を御前に侍もて忘れ給ふ事の由をも知べし。○内侍は宇知都美佐年良比と訓ばし。即本書に訓に依れ巳。カヒは三サの古假字あり。

フも音便おれバをらば。名義男も外事を専と仕奉るを。内御屋に侍ひ仕ふる由おア。後よハ字音は那伊斯と称ふ。ちて此官の始を或説ふ。此の大宮賣命の故事をア起れる由云ふも信ふ然る説ふて。廣成宿禰は。さ記さきと。ふ趣も。縁也とおそ言ふ。さる意とも聞え。ア。斯て後ふ此職掌を定て。尚侍典侍。掌侍を別られ。ア。尚侍ハ。ナイレノカミ。典侍も。ナイ唱ふこと。禁中名目抄に見えと。後宮職員令ふ。尚侍二人。掌供奉。掌侍。奏請宣傳。撿挍。女孺。兼知内外命婦朝参及禁内礼式之事。典侍四人。掌同尚侍。唯不得奏請宣傳。若无尚侍者。得奏請宣傳。掌侍四人。掌同典侍。唯不得奏請宣傳と見え。尚侍典侍。

掌侍を云ばなれて内侍と云ひ。其中より以一内侍為句當禁秘御抄より見えたり。此内侍ゐたちの常ゐ侍居る局を。内侍局とも。内侍所とも云ゐ也。御璽の神鏡も此局ゐ御坐て。内侍等の侍ひ仕奉る故ゐ内侍所の神鏡とも申あり。まと直より神鏡を内侍所とも申せり。さてしゝ内侍の仕奉る事本も全こゝ〳〵れ縁よりをることとあり。○善言美詞も袁加斯伎言宇流波志伎詞を訓べし。此も本書より訓を闕とまと。和君臣間。今宸襟悦懌とあるより就て。新よかくも訓ゐあり。善言といふ。天皇命の大御心れむ〳〵ゐ〳〵れ坐る時ゐど。其を休奉らむ爲ゐ。態とをかしゞゐ物言ゐどして。御心なと也奉るを云ばし。美詞をも其御怒也坐ゐ時ゐど。詞を美くして。其を和ち奉也。御心をとめ奉るれゞを云ばし。○和君臣之間とも天皇の御心

より應ざる事ゐのりて。御臣とちの。大御前を憚也畏むゐと。の有ゐ時ゐゞゐ。其を取直し和ゐ由れゆ。○宸襟も。大御心と云言より借まる漢字ゐめ。美母能淤母比と訓べし。御物想の義ゐめ。ちて大御心を悅しむとも上ゐ云へる如くち。和し直し悅し奉るを云。但し此い。今世云くと所大問の頃も。内侍の内より仕奉ゐ状の。斯在しことを知べし。然るを。今文より。少らもの〳〵るゐ〳〵ろむへの見えざるも。嚴ゐる事のみ記さまとるより。内侍の仕奉る事の状い。必此より見えとる如くゐゐべき事とこそ所思れ。ちて内侍の仕奉る狀も。如此。よて。其も大宮能賣命の。此時然して。大御神ゐ御心をとも奉まるゐれらひ因るゐとゐも。其證も。此神ゐ申ゐ祝詞ゐ。大宮賣命登御名乎申

事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐參入罷出人能選比所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志（古語云夜波志）坐氐皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒手繦懸伴緒手蹟足蹟（古語云不令爲氐麻我比）親王諸王諸臣百官人等乎己乖乖不令在邪意穢心無久宮進米進宮勤勤之米氐咎過在乎波見直志聞直坐氐平良氣久安良氣久令仕奉坐爾依氐大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白と所の卍（おのの全文は神武天皇卷の本文ふ挙おきむ凡てれ意は彼処ふ注ふべし）是ふて御名の義も御功のおをも知られあ卍かく君と臣をれ御間取持ち侍あ万ふ德れ卓れて大ふ坐が故ふ神祇官の八

柱の神れ連ふも祭られ給ひ（但し此八神の中ふ此神をとるふて其は貞觀おどとりた後おるべく所も祭給万る事は後ふ加へ思あり其由ハ神武天皇卷ふ委くいふばし）はと朝廷ふ仕奉る官人等ハ更ふも云は爲古くは末くれ人まで祭を外して其御幸ひを祈白せるおとふおむ有々る其は兵範記ふ保元三年正月九日殿下宮咲祭如例右大臣殿御方初有此儀云く家令大舍人允紀宗頼爲祝師と見え（伊呂波字類抄ふも宮咲祭正月十二月初午日院宮諸家祭之と所りこの諸家祭之とるふて誰も祭卍しこと知ばし）拾芥抄ふ其祭文を載らき あ卍其文ふ某年某月壬午年加中仁月乎擇比月加中仁日乎擇比日加中仁時乎擇天挂毛畏支宮咲五柱笠間乃廣前仁某恐美恐美毛

申給久。五柱と云る心得ゲ為し。此れ後より配祭まる神の。四柱ありしよやさて笠間と申ほこともに。未思得ぬ。うおぼ物語。国も於りの巻より。つぎのふとより。女れ手より。て。今日あらむ。からうじて。一おり祈りおる。ひらでくぼて。すえ。れどう祈ぎおとも。れ。らぼあ。ぢより。笠間より。れ神の。おおのる。くぎてぎ。ぢ〳〵云〳〵と云ひ。実方家集ふ。〔云の求〕ふ坐ぢ笠間の神のあう。ぢ。せむ。ふりふし中をいう。で。とむましと。詠るおどれ。決て此より由云る事あらむを。後人をく考ずてよ。絹波乍編綿波乍結進物波高抔加彌高仁飯乃方毛利加仁清酒乃早仁堅酒乃堅樀乃忽仁餅乃持天榮仁。鯛乃平仁鱒乃彌益く仁鯛乃好美好美仁鮑乃片罡仁蠣乃掻寄天薺乃庭佐良須嚴久聞食受納給天壽長久身全志天天地乃不祥内外乃惡事未萌以前仁兼天波遠久拂比退介給天官爵如意仁叶志女給天萬世仁子孫繁昌門止有志女夜乃守里日乃守里仁常磐堅磐仁守里幸戸給閉止恐美恐美毛申須。此れ今井似閑ゲ。万葉緯より引る本より依て。彼此字を正して引るあり。飯れカタカユと訓さり。和名抄より。饘加太加由と云り。薺の訓はニハナゥ。是ふて其祭のさは供進物あぞれ種くも知らきとぢ。ちて此祭文いと上れぢし世の文とハ見え祈ど。むげより下きる世の物とも見えぢまと餘れ祭文の例と比ぢ思ふふ。おれぢゥら文のをゥしげより聞ゆ依れ。所由云る事あるぢし。さて上件れ故実よりをる時れ。誰もとく祭らでハ。得有まじ。死神あれ。今世ふれ。祭る人女をさ〳〵聞ゆる事あきハ。故事を尋ぬる人の。少き故あらむゥし。ちて此神を祭まる依社れ神祇官の八神殿れ外ふも。神名式より。造酒司坐大宮賣神社四座。並大月次新嘗。文德天

皇紀。齊衡三年九月。造酒司酒甕神。此を宇迦之御魂神の霊代あり。其を酒殿神の神躰を根倉三カと云ちし。本記に有て知るべし。従五位下。大邑刀自。小邑刀自等。並預春秋祭と有り。おれに依きて相殿に坐三柱を酒甕神。大邑刀自。小邑刀自と申に也。さて大宮。賣命の造酒司に祭らき給ふことハ。大御心を悦しめ仕奉人とちれ手。蹟足。蹟おどのらせば侍むしめ給ふ御功に依ことなるべし。まと式に丹後。丹後国丹波郡大宮賣神社二座名神大。貞觀元年正月。丹後国従五位下。大宮賣神。従五位上。と国史に見ゆ。まと式に武蔵国埼玉郡に宮目神社おどのり。とあり。中社稲倉魂命。播百谷神也。一名豊宇気姫命。○鋏亂云。谷を穀と同音の字故に借て書るおり。上社猿田彦命とのるハ。をく事實に符ひて。後人のおしのゆに思寄るはじき説おゆ。扨まと笠間と云名にて祭まるを。式に越前国坂井郡に笠間神社。加賀国石川郡に笠間神社。大和国宇陀郡に笠間櫻寶神社おぞのり。和名抄に加賀国石川郡笠間。加佐万と見ゆ。笠間神社此処おるばし。常陸国に笠間を云処のり由のるさて此神はかく太じき有功の神おるを。記紀共に傳洩し。ゆ。然るを拾遺に其事蹟を傳ゆ。ゆ。おとれき賜物おりれり。然るは下第六十一段。に舉るが如く。是太玉命久志備所生之神と有て。大宮能賣命は。宝に常に殊おに功德ある神おに故に其生坐る時に。久志備おに祥有しれに。何れに事の有しゆ。傳おれれど知ばのらば。かくを久志備と云語意は。

天照大御神の生坐し時ふ。伊邪那岐大神喜曰吾息雖多未有如此靈異之兒也詔ひ。丹後風土記ふ。與謝郡郡家東北隅方有速石里。此里之海有長大石前云く。先名天梯立後名久志備濱。然云者国生大神伊射奈藝命。天為通行而梯作立。故云天梯立神御寢坐間仕伏仍怪久志備坐。故はと皇美麻命御天降の所ふ。日云久志備濱云く。と見え。はと久士布流多気と向襲之高千穂槵日二上峰と有ア。はと久士布流多気とも有れど。クレビクレビブルと活用く語也見も。是らを考合せて久志備と云言義をも辨ぢ志。然れど大宮能賣命と稱奈は。萬幡豐秋津比賣命亦云。拷幡千々比賣命。ハ。大御神の御前ふ侍ひて。宮内の事取もち給へ流。功を稱へと流亦名ふて。豐秋津比賣命ハ。產靈神の御子ふ坐まはこと。上ふ見とり。やゞて天宇受賣命ふ拔有れる。其ハまふ上ふ記せる。大宮

賣命ハ事蹟をよく讀み熟思ふべし。決ハて宇受賣命ふる法き事狀ふて拾遺の傳ハふ〻きを思ふふも天鈿女命。其神强悍猛固故以為名以眞辟葛爲鬘以蘿葛爲手繦云く。令天手力雄神引啓其扉遷座新殿則云く。令大宮賣神侍於御前。如今世内侍善言美詞和豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守君臣間令宸襟悅懌也。衛殿門とこのアヒ此文豐磐間戸櫛磐間戸命と申せるハ。石戸別命の亦名ふることを心ふ留おきて見る時ハ是やゞて手力雄命ハ流ハく思得られ。其事情ふ思ひ合せて。大宮賣命。やゞて宇受賣命ふるべしとゞこのアヒハ誰も思得ふべき趣ふめりし。然のみれらば大宮賣命の事蹟ハ。

悉く宇受賣命先きとる。まと宇受賣命を。然れこの巳太じ
紀神おゐよ。其を祭まゐ社とてを。一ッあゐ有ことおくて。
必此神を祭るばき祭事ゐ。大宮賣命を祭まるおどを以
て曉ばし。そを上ゐ引とる。大殿祭の詞別、祝詞まと宮咩、
るべき祭事 祭文おどの状を思ふゐ決めて宇受賣命を祭
おるをや。 おゐ言をで書紀ゐ素戔嗚尊の既ゐ高天原
を逐をまて後ゐ。復上巳給ふ處ゐ。天鈿女見之而告言於
日神と見えある事蹟を此ゐ令大宮賣神侍於御前とゐ
る事蹟まと此神ゐ白ば祝詞ゐ同殿能裏爾塞坐氏。参入
罷出人能選比所知志と云るおどゐ思ひ合せて御前ゐ
侍ひ塞めて参入罷出る人の選を掌ばるおとを。必強悍

猛固ある宇受賣命おらでを得勤むまじき事を辨へ。宮
賣宇受賣同神おる事を思ひ決む可ち。猶正く思決むばき証ゐるを。其を
第五十四段天宇受賣命の御名の出さる処ゐ云り。此と合せて思ひ辨ふべし。ちて又拷幡千々
比賣命と同神ゐ知べく所思る由を。伊勢大御神の相殿
ゐ坐まば二座の神を。内宮儀式ゐ天手力男神萬幡豐秋
津姫命也とゐるハ正説おどら。此神等の相殿とおゐ給
ふるを。豐受大神の外宮ゐ鎮座しおどをり此事ゐて。其
をめ以前を。此二神を合せて。御戸開神を申せし神等ゐ
ゐ。此等の事委くを。第百三十四段此二柱神者。幷祭伊須受宮とゐる処ゐ云を見べし。其を大神宮
本記ゐ天照大神一座。相殿神二座。左天兒屋命右天太玉命とあめて。

是亦いと正き傳あり。此事も別に御戸開神二座。天手力男神。拷幡千々姫神とあり。鎮座本記。鎮座傳記。鎮座次第記。神名祕書。鎮座本縁も同じ。此をおく。此傳を合せて考るに。手力男神を御戸開神と申て祭らむことは。石屋の戸を別開あるべきを。然るに拷幡千々姫命を。宇受賣命と別神として。御戸開神と申て祭らむおとは。更に由なく。手力男神と共に祭て。御戸開神と申ては可きは。必天宇受賣命なるべきものなり。上に云へる説どもを考へ合せて曉べし。然まども拷幡千々姫命と云説は。諸書の説とく符て誤とも所聞ざれは。決定て宇受賣命。亦名大宮賣神と。同神なるべく所思あり。此おと委くは第百三十四段御戸開之神也。とある処に云べし。○天

石戸別命。櫛石窓命。豐石窓命。此段は都て。拾遺を取て記れあまど。豐石窓。櫛石窓と申ては。石戸別命の亦名と爲なる。古事記に據てなり。まと此神。やゞて手力男命に坐ことは。上に委く云りき。記傳に。石門別てふ名は。石屋戸。段の時。天石屋の戸を。開き分けとる意の如く聞ゆ。然まども此神に然る由はなしと云まして。考は粗ゝ此しなり。名義。櫛。豐は共に例は稱名。窓は眞門の意なるべし。窓と作るも。間戸と作るも。とゝに借字なり。○令守衛其殿門。而此は彼新宮の御門を。守らせあるに由て。其は石屋戸を引開あれ功を。其は。負て仕奉らむ。外の。此因縁に依て。此神を御門神とは祭るおとなり。其は古事記に。石門別命。亦謂櫛石窓命。亦謂豐石窓命。此者御門神也。まと拾遺。神武天皇段に。櫛

磐間戸神、豊磐間戸神（今御門所奉齋也、巫）と見え、神名式に神祇官、西院坐御門巫祭神八座（並大月次新嘗）櫛石窓神（四面門各一座）豊石窓神（四面門各一座）をいふ是亦巫（櫛石窓豊石窓と申に二名を二神として四方の御門に各一座おく〳〵祭る故に出ていふ八座あり）清和天皇紀貞観元年正月に此二神に従四位上を授け奉給ふ由見ゆ（おれまでは無位なりき）四時祭式に五月十二月四面御門祭（御門巫行是）といふ也此神の祭なり。祝詞式に其祝詞いの巫（其は大殿祭の次に上は奉る大宮賣命に白に祝詞いのうて其次に載られとり此は故あるおとあり其由は神武天皇卷に云ふべし）其詞に櫛磐牖豊磐牖命登御名乎申事波四方内外御門爾如湯津磐村久塞坐氏四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久自上往波上護利自下往波下護利待防掃却言排坐氏朝波開門夕波閉門氏参入罷出人名乎問所知志咎過在乎波神直備大直備爾見直聞直坐氏平良氣久安良氣久令奉仕賜故爾豊磐牖命櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久登白といの巫（祈年祭祝詞にも御門能御巫能称辞竟奉皇神等能前尓白久櫛磐間門命豊磐間門命登御名者白氏辞竟奉者四方能御門弥湯津磐村能如塞坐氏朝者御門開奉夕者御門閉奉氏疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守夜能守日能守尓守奉故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎称辞竟奉久登宣と見も月次祭の詞も同じ）おれ此時の功を本として稱辭ありを以て此神に御門を守衛し免とふた禍津神等の入來てまと妥禍事せむおと

を思ひて外る事、義を曉べし。又かく御門の開閉をさ司ふ。掌給へ卍し故ふ。亦、名を阿居太都命と申せるおと知可し。此事、上第四十九段、天語連の処ゟ云、るゝと合せ考ふべし。ちて神祇官西院の外ふも。神名式ふ。丹波国多記郡。櫛石窓神、社二座。並名神大。とゐの卍。二座のうち、一座ゑ、豊石窓神ゐること決し。此社のおと。神祇伯顯廣王記ふ。本官西院、北舍坐四面御門、神、大内建禮建春門等令坐之神也。本社在但波国令坐宮城門之上と見えゐれど。御門、巫の祭る八座、神ゑもと丹波国を卍、御霊を分け移し奉る外卍れゆ。此神の當国ゟ鎮坐せる事ゑ、彼豊宇気神の、比沼麻奈井ふ鎮坐卍し縁ゟ依まることあ遂べし。丹後国丹波郡ゟ大宮賣神社ゐるふても、然ゑ思ゑ侯〳〵あり。まと櫛石窓神社の在る多紀郡ゟ大賣神社

と云ゲ式ゟ見えとるも、大宮賣神ふゑゐら、ざるの尋べし。御社ゑ、寺内村と云ゟ在とぞ。ちて又式外ゐまども。伊勢大御神宮ふも。此神を祭らまさゆ。其ゑ倭姫命世記ふ。御門、神豐石窓櫛石窓神。四至神、四十四前宮中祭之と見え。御鎮座傳記ゟも。御門、神二座。豊石窓神、櫛石窓神。とゐゆ。此ゑ大内と同く。必祭卍給ふべき謂ゐまバ。式外ゐ卍ぞて鹿畧ふ思奉るべきおとふ非ず。伊勢、神名祕書ゟも。御門、神、豊四十四前宮中祭之号式外、社也。無宝殿也と見えて。外宮ゟも同く坐ゐとし。世記ゟも。此書ゟも云、るハ。信ゟ然るし。まと清和天皇紀貞觀元年五月ふ。山城国天照御門、神ふ。從五位下を授られしおと見ゆ。此ゑ天照大御神の御門を守衛とゐ奉る由ゟて。称、とる御名ゐるべし。まと神名式ふ。越前国足羽郡。御門、神社。能

登国能登郡御門主比古神社（此二社も決て石戸別命おるべし）大和国高市郡天津石門別神社此社も清和天皇紀に貞観十七年三月授大和国正五位下天石戸別神従四位下と見ゆ。まと式に攝津国嶋下郡天石門別神社（此社も今茨木村と云に在と帳考に云り）近江国伊香郡天石門別神社陸奥国白川郡伊波止和氣神社此社も仁明天皇紀承和十年九月奉授陸奥国勲九等石波止和氣神従五位下と見ゆ。（神名帳頭注に陸奥国白川郡伊和止和介手力雄命と云るも拠ありて云るも例のおしなべての當まるあるべし）まと右社に並て都く古和氣神大（名神）仁明天皇紀に承和八年正月奉授坐陸奥国白河郡勲十等都く古和氣神従五位下同三月授従五位上と見ゆ。まと式に同郡に石都く古和氣神社と云もなべて上ある都く古和氣神社も国の一宮にて當国の事を記せる觀迹聞老志と云ものに都く古和氣神社關山明神乃是也往時關山去今新宮東可二里松杉欝欝峙于白河城外驛口今社地在白坂奥野之疆建両社以爲關山神といへり（関とも名に負ふ白河関あり）是にをりて按に都く古和氣神社を申べも決て石戸別神おるべくおぼゆ（一宮記にまと神名帳頭注に味鉏高彦根神とせるも例の信がたし）ちなみに此郡に伊波止和氣神社おるおとは必關守る謂にをる事おなばなるべ。此御社おそ一宮を坐て關神と申べきに然も非て都

都古和氣神社を一宮と申し關山明神とさへ申すて然ハ推量らるゝなり。然ハ石都々古和氣神社も同神なるべきことゝ准へて知るべし。石都々古和気と云ひ都々古和気といふ共に石戸別を訛きるまて此は道奥人の唱へ誤りなりけむを其唱へのまゝに記し傳へさるならむも知るべからず下に挙さる伊豆国伊波氏別命神社の処に云る字考ふべし光仁天皇紀寶龜十一年十二月此處り。鎮守副將軍百濟王俊哲等賊に圍まし時右の神なちに祈りて神力を蒙りしに依て幣社に預らむ事を請申しゝかバ許し給へりしことと見ゆ。又東鑑に文治五年七月白河関を越て関明神に奉幣せられし事ありし其は泰衡を征つときのことなりき。式に美作國英多郡天石門別神社。此社は清和天皇紀に貞觀五年五月。美作國從五位下。天石門別神授從五位上と見ゆ。此社は今川會庄宮地早滝と云る在と帳考にいへり。又式に備前國御野郡。石門別神社。當國の式社考に今田住村と云に在と云り。石門別神社。當國の式社考に大供村といふに在て戸隠宮と称ばさいへり。戸隠といふは手力男神と云古傳の存れるなるべし。清和天皇紀に貞觀五年安藝國正六位上天磐門別神に從五位下を授けられしこと。此神社いづこにか在ゝ尋ぬべし。又同七年に。太政大臣東京第天石戸開神に從三位を授けられし事など見ゆ。この石戸開字御戸開神の開字アケと訓むべきことゝまさしまさし式に。土佐國吾川郡。天石門別安國玉神社。印本玉字の下に主字あり。今は信友が校合さる古本三つによりぬ。上田百樹云。二字なり。今も國玉とのみ云て。玉主とはいはずと云り。と云もなり。

此れ石屋戸を開さるふ依て天も国も照明り安らゝよあきるふどの意を以て称へる御名ふや。はと伊

豆国加茂郡。伊波氏別命神社。伊豆志に君沢郡梅名村に坐に慶長九年の棟札ふ天石戸別又名櫛石窓亦神石窓此御門之神也とあり今右内明神といふ上梁文にも賀茂郡田方荘梅名村やゝ石ゝり。三島大社ゝり迂出を以て祠地のみ賀茂郡とゝること。大社の例れ如きゝと云り。大社とも伊豆三島神社のあと。とあり。伊波氏別神社の三島神社ふ由石る事第百三十一段ふ委く云り。さて隣郡田方郡ふ劔刀石床別命神社石ゝり。此も同神あらむゝそも石床とも下ふ挙さる石座神社の石座と同義ふ聞めきバふ。伊豆志ふも君沢郡谷田村ふ坐て日本武等と云ふまさ御嶽権現と云ふまさ下宮とも申ゝし云り。さて劔刀も石の波ふの辞ゝまさふ就て思ふふ上ふ挙さる陸奥国ふ係石都古和気神社の石都くも古も石床を訛きる発ふ有べし。

伊波久良和氣命神社。伊豆志ふ当郡八幡野村八幡宮も配祀に八幡ハ上古の神ふ上して本宮あり。木宮も古老相傳て伊波久良和気命と云今も二宮れ已祭のとき酒を竹筒ふ盛りて伊古奈比咩

神社ふおくる礼ありと云り。伊古奈比咩神社も式ふ同郡ふ載らきさり。さて伊波久良和気神社の彼社ふ由あること此も第百三十一段ふ云べし。

田方郡ふ引手力命神社。伊豆志ふ賀茂郡十足村ふ手力雄山ありて社あし。をどゞ場と云処あり。今は坂といふをどゞを為て祭りし処ゝゝ云已。引手力命とも石戸を引開さる由の御名ふるべし。

那賀郡ふ石倉命神社。ふ余餘国ゝ滋賀郡ふ石坐神社若狭国遠敷郡ふ石鞍比古神社石鞍比賣神社並て石已越前国大野郡ふ磐座神社能登国鳳至郡ふ石倉比古神社ふどゝ石ゝり。石鞍と作るも多ゝ同じふとふり。其も参河国礼ふ石座神社を文徳天皇紀陽成天皇紀礼どふ石鞍と作るふてふる。

ぼし。さて石倉の義も前ふいひき。

あぜ有已。此国ふも。

石戸別命ふ由石る社の殊ふ多ゝきぞ。四社共ふ石戸別命ふるぼし。中ふ伊波氏別神社も上梁文ふ天石戸別と記し。引手力命神社は手力雄山と云ふ石きむさら其由縁石る社どもも。伊豆三島神社。阿波命神社。

伊古奈比咩命神社おゞ是おゐ。阿波命ハ石戸別命の御女なり。伊豆三島神社本后ハ坐まし。伊古奈比咩命ハ三島神の後后ハ坐ゆ。是等の事委くハ第百三十一段ハ注ハ見よ。まと式ハ。尾張国中嶋郡石刀神社。石見国那賀郡大祭天石門彦神社おゞ石ゐ。此石門彦神の鎮坐ハ郡を那賀と云を思ふ。此ハ伊豆国ハ郡の名あれば彼国を移せるハハ石ゐらじゝ。ちて大祭とハいゝある意ハ思ひ得ぬ信友ハ此国ハ大某を云地名多くまず大祭と云意ハやと云〇大殿祭御門祭供奉矣ハ古語拾遺ハ。さも有むゝ。殿祭門祭者元太玉命供奉之儀齋部氏之所職也云ゝと石るハ依ゐて記せゐ。〇故天宇受賣命者御巫猿女君等出祖也。ハれも拾遺ハ。ゐりて記せり。〇天石門別神此神者御門之神也。ハれ古事記ハ。天石戸別神。亦名謂櫛石窓神。亦名謂豊石窓神。此神者御門

之神也と有るハ依て記せる処ゐ。但し御門の開閉を掌り給ふ由ハ次くハ注ハ去を見て知るべし。〇阿居太都命天背男命ハを亦名と定ある由ハ。姓氏録左京神別ハ。縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也と見え。此傳ハ八世孫と石るハ誤あり。ゐ孫と石るべきものあり。其由下ハ云を見よ。ハれハ並ぶて大椋置始連縣犬養同祖阿居太都命之後也と云ひ。今木連神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也を云へるを。此も多くハ孫と有べきを五世孫とあるハ傳の誤あり。其由も下ハ云ふを見よ。まと巨椋連今木連同祖といひ。大椋巨椋ゐ同じおとなて。部弓削ゐど云類ハ大椋の複姓あり。宮部造天壁立命子。天背男命之後也。を也云るを合考ふるハ。大椋今木宮部ハ同祖ハて天壁

立命と云るは天底立命ある故を灼く。ソコカベ同義なる由は第二段傳
に委く辨へるを見るべし。まと神宮部造合せ考 阿居太
ふべし。葛城猪石岡天降天破命之後也とあり。
都命。天背男命同神なるなと。天壁立命子。天背男命とあ
ふるによて著く。阿居太都と申を以て。天手力男命亦名天石戸別命
の。亦名ありとは知られあり。故縣犬養宿禰條に神魂命八世孫阿居太都命といひ
今本連條に神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命と云る五世
八世共に誤なて。あゝに孫とあるべきものあり。とは云
るあり。其は此神。大御神の刺隱坐ち〳〵石屋戸を開あ乃
ひ。功績に依りて。彼新宮は御門を守護り。其開闔を掌給
ひ。その由は上の御門祭の詞を引て云る処。立帰り見るべし。その因縁によりて。御齋
は大伴氏。佐伯氏。御門の開闔を掌とりしなり。此事第百三十七段

天押日命の下に委く云を見よ。此神の御名に。かく負坐れむは。然る事
あり。れり。○犬養は姓氏錄攝津國天神に多米連神魂
命五世孫。五世は三世の誤なる。ことは上に云るゞ如し。天比和志命之後也。とあり
に條の次に犬養同神を云ふ。十九世孫田根連之後也。
とあるに依て記せり。さて犬養とは。犬を養ひ走して。獵を
爲に職號は。姓に。あきるなるし。其は高野天皇紀。天平神護元年五月の処に
馬養造人上。祖以能養馬。仕上宮大子。被任馬司庚
午籍編馬養造云〻とあるに准へて知るべし。○縣犬
養宿禰。此は姓氏錄左京天神に。縣犬養宿禰。神魂命八世孫。阿
居太都命之後也。と有に依て記せり。但し八世孫とあるは誤なて。直に孫あ
ると上に云りき。上に舉る。犬養氏の條ある。田根連は。阿居太

八十五

都命の裔なることを。上に引る文に。天語連。縣犬養同祖。天日鷲命之後也。と有るによりて著く。田根連と云るが。末を云ひ。阿居太都命をいへるが本を挙たるなり。故此姓を天日鷲命の裔として、此に記しつ。さて此姓の。元は犬養と汎み稱けむを。御縣に居なりし故に。縣犬養とは云ならむ。天武天皇紀に。十三年。縣犬養連賜姓曰宿禰とあり。然れど此より前に。連の加婆禰にて有しなり。是に就て思へば、犬養部の群主とありし職号を、やがて戸と為さるなり。なお国史に。神亀四年十二月の処。また宝亀二年九月の処などに。此氏人のあると見ゆ。合せ考ふべし。

故天照大御神。出坐天石屋戸出時。天原及天下。自得照明。而。八百萬神。衆俱相見。面皆明白矣。爾伸手而歌舞。相與稱曰。阿波禮。阿那於茂志呂。阿那多能志。阿那佐夜憩。飫憩矣。此者大

直會（ナホラヘノ）事（コトノ）本（モトナリ）也。

自得照明而（オノヅカラ）能豆加良（ヅカラ）氏理阿加理（ラテリアカリ）氏。と訓ばし。故（ゆえに）此（ここ）まで古事記を取まり。ちて大御神の出御（いでまし）るはやがて禍事れ直れるあるを依て。火産靈神れ德（イサヲ）も。本の如く炫（カヾヤ）れ玉し。れ玉。第四十三段。終の処を記せる。或人れ問ふ答へる説を合せ考ふべし。○面（オモテ）皆明白矣（あきらけし）。玉。称曰。云く矣まで拾遺を取まり。明白矣は。志留（シル）加理（カリ）伎と訓ばし。わがりふ燭（トモシビ）を燃（モ）して。相見と云ふこの玉れ。髣髴（オボくレ）かゆし。神の面輪（オモワ）の。みを炳（ヒ）ら（ル）く見える由をゆ。○伸手（ノレテヲ）而歌舞（テウタヒテヒ）て。歡喜れ餘玉ふ。神ゑち皆起（タチ）て舞ふれ玉。○相與稱曰（カヒトモニトナヘタマヒ）とは。八百万神ゑち諸與（モロトモ）に。聲をうち舉て謠（ウタ）る由を玉。○阿波禮（アハレ）れ。師説ふ。見る物。きく物。ふ（ル）ふ（ル）事ふ。心の感（ウゴ）きて出る。歎息れ聲にて。今俗にも。ア。ヽを云ひ。パレ。を云是ふて。譬へば月花を見感て。ア、見事ふ花じ（ヒ）やハレ。と云月ゥ見れ。と云是ふり。此ア。ヽを。パレ。と重玉と云もの玉。此を後世にれ。ゑ（ル）ぶ悲き事をのみ云て。哀字をゥき玉ども。哀れとぶ。阿波礼の中れ一ッにそ云き。阿波礼れ。哀の心をハ限らぬふり。万葉に。阿波礼に。何怜ふど〳〵書とき。此もとぶ。一方にれ義理れ尽さぶるふ玉。阿那（アナ）と云ひ。阿夜（アヤ）といふ阿安同じ。はと波夜とも。波母（ハモ）とも云へる波も。波禮（ハレ）の波を同じ。仁賢紀に。吾夫何怜矣。此云阿我図摩播耶と見え。皇極紀に。咄嗟ふどを。阿夜と訓るに。て知ばし。まと漢文ふ。嗚乎。于嗟れぞの字を。阿〳〵を訓こと多し。ふの阿〳〵も。同じ歎（なげき）言ふり。此の歌に。阿波禮。阿那と重ねて云へるも。

歎息(なげき)は詞なる故なり。然はなを本書は阿波礼言天晴也と
学者此注はまをひて阿波礼の注を臆説なして信はさらば
まと後世はを阿波礼は天晴の意とは思ひそを
かやうの処もを波を音便は和をいへども古を
如く唱へしあり殊は此阿波礼と云言は歎く色はて阿
アとハレとの重りとるあれど更あり拾遺は阿波礼を
言天晴也を云るは太じき非言なれども是はてもその
かみハレを晴れ如く唱へしあとを知べしまと俗
は天晴といふ詞を古の阿波礼なれ先て云あり　かく
て古歌は阿波禮を詠米るを古事記は倭建命の御歌は
一ッ松阿波禮書紀は聖徳太子は御歌は旅人(たびと)阿波禮此外
思ひ妻阿波礼まと影姫阿波礼は
ど〳〵云る哥も同じ詠うとあり　是ら後世の意をもて
思ふは其を阿波禮は思ふと云意は聞もまども上ッ古の
意は然らば共は歎辭(なげきことば)はして一ッ松をや旅人をやと云は

同じ倭建命の吾妻者耶と詔ひを
はどは思ひ合せて知るべし　まと万葉は阿波禮を
は島吾子はも阿波禮は詠るを言ひとれみ少し異なる
まど意は右は同くはの万葉の二首共は文字をいはを
も阿怜とうけは此二字を仁賢紀は
播耶と訓はもて阿波礼も歎
ぎる辞はるることを知べし　感じて直は　アハレを歎(なげき)
とはまく　ぬいへはは　は　此詞の本は　阿波礼くくとは
波礼はのはうと過しはる　然
うは礼どの類も同じ
世くは轉(うつ)は本は意とは違ひもくはと多き物は
の歎息は詞も後はさはぐくは用ひて其用ひ狀は依
ては意も異はるは如く聞もはもはのは其はまは万葉十
八は郭子は鳴を知くは詠る長歌は　うちれげき　はのはを

の島といはぬ時なし。此はまさしく後の詠方(ヨミザマ)に似たり。前
にひく歌どもの言(コト)のさと異(カハ)れり。それ故はまづ上代の哥に詠る状は。一ッ松あ
はれ。旅人あはれ。あはれ其島。などやうに。其物くにふまへ
て。心に感く時に。某あはれと歎ずる詞なり。あはれ其島
とよめるも。あゝ其島と云むが如く。是も同く歎ずる詞
なり。然るに此哥に。あはれの島と詠るは。言(コト)ざま少し変
りて。あはれと歎ずべき物を。其後に至りては。阿波禮と
指て。あはれの島と云へり。蜻蛉日記に文に關はりみ。阿波礼〳〵と覚え
けむ。て。ゆくさきを見やりさまバ云〳〵。とあり。此も同
く。心の内に阿波禮てふ。古今集に。阿波礼てふ言はま
歎ずるなり。さふやらじとや。春に後れて獨
咲らむ。詰む人の花を見て。感て。アハレと云詞を。其花
は心に。他は花まさは花みをやらば。已にして然い
はまむと思ひてや。他は花の皆ちりて後阿波禮といふ。
にひとりわくまで咲ぬらむと詠るなり。
拾遺集に。あはぬ人をまさみ待ぬ〳〵久方の月を阿波礼と
いはぬ夜ぞなき。此も阿波礼〳〵と歎ずる字。阿波礼

といふと云阿波禮と見ゆ。古今集に。紫(ムラサキ)の一(ト)もと故に武
へるなり。藏野の。草ハみながら阿波礼
とぞ見る。おも心に。阿波阿波禮とおもふ。古今集に。立の
礼と歎じて見るなり。へり阿波礼と
ぞ思ふとそみても。人の心をおきつしら波。
此も阿波礼を心に感じて。歎ずる義なり。見ずと云は。
みな其物に心うごきて。歎息(ナゲキ)するを云へり。は阿波禮
をしは。後撰集に。何さらぞの月と花とを同
くは。阿波礼しれらむ人に見せばや。此等(レ)の外に
阿波禮を見は。阿波禮と兜く。阿波禮に多へば。など云へ
るさをひは。都(スベ)て何事にまれ。ア。ハ。レ。を感ぜらるゝさ
はを名おはて。阿波禮(アハレ)と云物にして云へるなり。如此く
阿波禮と云ふ言(コトバ)は。さはさ言(ヒ)ろさ變り多けれども其意
はこれ同じ事にて。見る物きく事なれわざにぬきて情(ココロ)

の深く感ずることを云ふ。まと物をいれぶといふ
るはとあり。古今集より霞をいれまぶ。言も。もとアハレを感ぶ
と心得とまども。然ふ非ぶ。凡て嬉しとも。哀しとも。楽
しきも。哀しき女。恋しとも。情より感じて。アハレと思ふる事を。みな阿波礼あり。ちきだれも志
ろき事をこの志紀事ぬきをも。阿波禮と云ふ例はと多し。
此ふ神等は。阿波禮。阿那淤母志呂を。歌ひ給るよて知る
ばし。又物語文などより。阿波禮ふをかしう。阿波禮ふう
きをうあぜ〜連けて云ふ。伊勢物語より。此男。人の国に。夜ごとわ來ぬ。笛をい
とれもしろく吹て。声をうちうてぞ。阿波礼より謠ひけ
るとあり。笛をおもしろく吹て。字ふ声のをのちぎり
阿波礼あり。蜻蛉日記より。ぬ祢むもろ妬ち〜ちも。阿波礼
より。うれしう覚ゆること限りなし。是まと心ゆきて。嬉し
きはとより。阿波礼と云り。但し源氏物語ぬ。其外も。物語書より。をか

志ぬと阿波禮あるとを。反對ふして云ふる事も多し。此を
總ていふを別て云ぬ異ぬあり。總て云ふば。をかし妬
も。阿波禮の中ふおもきるおと。右より云ふ例ぬ如し。別ていい
ふ。人情ぬさはぐ〜ふ感く中ふをかしき事。嬉しきお
とあぜふ。感くこを淺し。悲しぬこと。戀ちきおを憂ぬ
事。哀ぬを心より思ふ。叶ぬ妬ぬをぢふは。感くことおを例
く深し。故ふそれ深き方を取わきても。阿波禮を云おと
有ふ。俗より悲哀をのみ阿波礼と云ふ。譬へば。總て木草ぬ花ぬ
多ふる中より。櫻をと。分て花と云て。梅より也對ぬ例ぬ如
し。源氏若菜。巻ふ梅花を。花のさかりふあらべて見むや。
と云ふこと。ぬ。梅花も花ぬれども。其より對へても。櫻

を取りけて花といへり。然きど阿波禮を云ことを。情の中に一ぢ
おもて云ね。取り記ていふ末のおもをかめ。其本を云ずて。總
て人情の事ふぬきて感くれ。こを阿波禮ぞ。故に人情
に深く感ぐべき事を。總て物に阿波禮とも云ぬ。物ハ感ぐ
とも。俗にも多く善事よのみ云ぬきども。おきも然ら也。
字書ふ感動也と云て。心に
れ。惡事ままき心の動きて。アハレとぞれむ。善事ままぐ
感ぐるおて。アハレと云詞ふ。をく當きる文字ぬ。漢文
に。感鬼神と有て。古今集の眞名序にも。然書れとるを。假
名序にも。おほろみをも。阿波禮と思ねせ。と書きるふ
て。アハレも。物ハ感ぐるとをふを知べし。大凡阿波禮
と云言の本。まと轉りて用ひとるやうぞ。上件にて心
得べし。まと物のアハレと云も同じこをふて。物と云ね
言を物いふ語ふを物ぞとる。まと物まうで。物見物いみ
ぶど云類の物にて。ひろく
いふときふ添る詞ぞ。

ちて我に。物の阿波禮を知る

と云ひ。知らぬと云差別ね。譬へば。ぬで多ぬ花を見さや
の。れる月ふ向ひて。阿波禮と情の感く。即こを物に阿波
禮を知ふぞ。おきそ。おきその月花に。阿波禮ふる趣きを。心に
れるおもむきを。辨ず知らぬ人ね。いろふぬでとき花を
見ても。皎ろふる月ふ向ひても。感くおとぶし。是をれね
ち物の阿波禮
をぞらぬふり。月花にみふ非ず。總て世中ふ。ぬのぞとある
事ふふきて。其趣き心ば。ず。辨へ知ぞて。うれしかるぞ
き事ね。嬉く。をのしかるべき事は可笑く。悲くるべき事
は悲く。戀しかふぞき事ね。戀ぞく。其くふ情の感くぐ。物
に阿波禮を知きるふぞ。其を何とも思ねば。情に感かぬ
ぐ。物の阿波禮をぞらぬふり。
ちきば物の阿波禮を知る我心ある人と云ひ。知らぬを。

心形き人と云ふ事西行法師の心ふき身よも阿波礼も知らきゝり。鳴さつ沢の秋れタぐき。此上句よ者ゝるべし。○今云此ゝ法師ゝ去ぢて君親妻子をも捨て。樹下石上をさ子ふ定きる住所とせば清く世情を離るゝ。を。専と為さるもの故ふ。阿波礼を知らぬ人ふり。その阿波礼知らぬ身よも。阿波礼ゝ知らるゝと訓るれり。伊勢物語ふ。むかし。男有け事。女をとかく云ふ事を月日ゝふれ事。岩木よし非礼ず。心ぐ流しをや思ひゝむ。やうゝ阿波禮と思ひれ事。是ふて。物の阿波禮を知ると云ふ味を知ぢし。さて物の阿波禮を知るとり。歌ゝ出來（イデク）流物ふり。古今集よ。古歌献事し時の目録れ長哥を。熟読て知るべし。神代ゝり詠來きる。四季恋雑れさ乃ゝの哥ゝ悉く。一の物ゝ阿波礼ゝり出來とり。と云意を詠と事て。四季と恋雑との間ふ年ごとふ時よ於け於ゝ。阿波礼てふ云を云ふ於ゝ。を言れと流。其前後の四季恋雑の哥ゝ。これ時ふつけ於ゝ出來ある哥ども。と

云義ふて。其物の阿波礼の品くを。目録ふ詠さる長歌ふり。心を著て読見るべし。後撰集ふ。所よて。去れ前ふ。かきれ物ゞと事し侍ゝ流を聞て。内ゝ事女の聲よて。ものやゝく。物ゝ阿波禮ゝ事ゝゞ於れる翁かふ。と云を聞て。貫之。阿波禮てふ言ふしる云ゝ無きども。言でゝえこそものら流物ふき。此詞書よ。ものやしく物の云るは。貫之ふるゝと事を知て。哥ゝみ貝ふ事と云事を。阿波礼ゝ事ゝりぞわふる。とぞ免いて云流言ふり。返答も其意を得て。哥ゝみとりと。て。何の益もあら祢ど。物の阿波礼ふ堪流時ゝ。ゝまでゝ。ものらきゝ流物よ。といふ下心ふり。阿波礼てふ言。と詠きと。るゝ。彼物よ感じて。歎息ける詞也。土佐日記ふ。もろゝ。ゝしも此方も。おもふ事ふ為へ流と。妃の事ゞとろ。ゞ歌ゝ。ゝむ事を云るれどふ。て知ぢし。とものゝ。此ゝ王の小櫛と。石上私淑言とふ言を。しを合せ見て。文を約免て注せる為り。

外れ引哥おどのことい。即此の神等れ。諸聲ふ歌ひ出給私淑言ふ委く見えとり。
牙るも其ゆえ。大御神の久しく刺幽居るを甚く憂ひ坐て。千ぢふ心を碎き謀ぢち給ひし如く出御して。本のぢと照明ひ。各く某くふ。面輪も炳焉く見え別ひしうむ。歡喜ふ堪ひ起舞ひ。言はでえぢそ在られぢふ。阿ゝ波禮ゑ歌ひ舉給牙ふこと。然有べき事ふあむ。（）阿那於茂志呂。ぢを本書注ふ。古語事之甚切皆稱阿那。一本ふ甚を至と作ひ是も非の言。衆面明白也と何ひ。阿那てふ言義む。此注ふ云らぶ。
るゞ如し。其を委くむ。第六段ふ注ひ。阿那迩夜志の処見るべし。まと第四段阿夜惶根神れ下をも合せ考へべし。於茂志呂も。本注ふ云牙る如くあきど。

黒白と對言ふ白の意ふむ非ぢ。此ハ師説ふ何ざやうふ。とく分ることゑふて。とれるろしゑ何るむろしも。粲明ろ能れ分ふぢと。まと御火白く燒け。と云へふ。今云此む古本の神楽哥次第ふ人長の主殿寮ふ令ある言ふ御火白久献礼と見も。即何ざやうふ明く火を燒け。と云るふり。まと軍書ふゑゑふ矢を射拔きて。鏃の著ハき出ぬ留を。矢ぢひ白く れど云ぬふ同じと有ひ。此む七里繁民ゞ師説をきゞ本ふ書入とひしを。其侭ふきて記しおき給る家信友り。此段ふ師説と云る注む。ふれそきふり。ふ注せるふ。けて齊明紀ふ。建王の薨ませる時の大御歌ふ。今城ふ留乎武例ゞ上ふ雲ぬふも。旨屢俱之多ゝ婆屢今本ふ居と作ひ。今む活板ふ依きり。何の嘆の矛。万葉ふも雲谷灼発。とと免る哥何り。此御歌の旨屢俱。やゞて此の志

呂と同じく。伊知自流斯の志流ふて。灼(ヤキ)た由ふれど。於母(オモ)志留(シル)を有ばきを。志呂(シロ)とゐるた。後れとふ子れ儘ふ記し傳へとるろ。本を已志留をも志呂をも言へ爲ふや。まと此の志呂た黒白の白れ意ふハゐら祢ど。黒白れ白も本た同言ふるべくおそ。まと同紀ふ。同王を葬奉きる。今城の地を詠ませる大御歌ふ。山踰て海わと俤と也於母之樓枳(オモシロキ)。今城の内たわ已爲もまじよ。とゐる淤母之樓た。此の於茂志呂と全(スタク)同言ふるを。前の御歌ふ。雲だふも灼(ヤキ)し立(タ)ゞと詠ませ俤と合せ按(オモ)ふふ。雲れ立を御覽(ハ)ふて。御子を偲(シヌ)び給ふ御心を。慰(ナグサ)め給ふ由よて。後世よおゞ志ろしと云俤ふ似とるた。此の於茂志呂を漸(ヤヽ)ふかく

も活用(カ)ゐる。ふ已れゆ。師説ふ。此於母之樓枳今城のうちはの御哥を引て。悲き事ふ。おもふろと詠給へり。さまふ。此言た。心の深くふむ意ふて。哀楽ふの〳〵たらば言ゲ。古意ふりて本書ふ面明白也と云る注を。俗意ふりと言をし由。右ふ云る書入ふ見えとき。廣成主の心も。黒白の白れ意ふれ非ず。故本文ふも注ふも。ゐ〳〵白とた書ば。明字を添て書きとり。然るを師た。本ふ明白ふ。シロシと假名を付とるをれみ。心ゑ留らきふふ明白ふ。シロシと假名を付とるをれみ。心ゑ留らきふふや。此た後人の已ざふるをや。○清濁考ふ。オモシロシとた。心ゑ挂るやうの事ふりと。ゐの已。今云。ふの大御哥の於母之樓枳た。オモシルキと訓べきゥとも思へど。ゐも。万葉十四ふ於毛思路伎をあるふ依て。シロと訓り。ち

て此た。今まで常闇ふして。燭(トモシビ)を燃(モ)しとるむかりよてた。猶(ナホ)おゞ〳〵ふく。分(ワ)難ふ已し神等れ面の。大御神の出御と共ふ。明白(イチシル)く見えゐるよ。各〳〵相見て。おゞえば。阿那面(オモ)明白(シル)と。歌ひ給へゐ事とぞ思ハる〳〵。今世よも思ふえば。必ずらしき物を見

とる時おどよ。於夜云くと言ひ出ることと有るに。此心ぞ
牙おり。前ゐ阿那と阿夜ぞ同言よて。驚きて嘆く色おり。
かくて俗よ驚の色ゐ。於夜といふ言のゐるい。
即是おりと云るを。此よ思ひ合せて辨ふべし。○阿那多
能志。おも本書注ゐ。言伸手而舞。今指樂事謂多能志。此意
也と。ゐの卍。言ゐ義に。信よ如此。くおらむゐ。但し多能志に。
多怒志ぞ有べき古言ゐ格おるを能と。ゐるに。後の言習
の儘ゐ記し傳へ。ゐるゐ。万葉よに多怒志ぞ。ゐの卍。まと古能
を怒と云ること多かきぞ。古くハ能と云べき
志ぞも怒志ぞも。二ゐよ云るゐや。万葉緯ゐ舉ゐる内
侍所御神樂式ゐ採物の篠歌よ。篠乃葉爾雪布理川毛留
冬乃夜爾豊乃安曾比乎須留我手伸左。と樂ゐ手伸と書
るおとも。由あ卍ておおや。さきど師に。多能志を。手伸の
義とおゐる本書注に。附會よ

て甚俗意おり。と言きしとぞ。此に然も有ゐむゐ。ちきど。
餘よ思ひ得さる説のおれば。姑く本書の注よ從ひて
あるちて憂ふる事に有てに。自然ゐ體に屈みて。伸やゐ
れらぬおく〜ちに体を。結滞ゐ心もとけ。其憂のとみよ
晴てに。その歡喜ゐ堪ぞて。阿〜波禮ぞうとひ。其情の感
く餘卍ゐ。手を伸て舞ふこぞ。おきまと自然に眞情ゐて。
阿那多能志ぞに。おきまで屈み卍し手も。伸やゐよゐ
れる由おるぼし。斯て多能志に。も。ぞ其立舞ふ狀を云る
體語に体ゐ。後ゐに麻美年の辭を添て。多能志美。多能志
年。多能志麻年。と活用しゐ体ゐて。多能志美と云に。其用
語の。まと體語ぞおきるおらむゐ。かく本の体語を用語
よ活用ひ。それ用語ゐ

まと躰語ふしとる語ども甚多ゝ卍。此言の義をも熟考ふべし。○阿那佐夜憇。古を信友本ふ書入ある。長谷川菅緒と云人の說ゝ。本註ふ竹葉之聲也とあるを非說なり。佐夜憇を。肥前風土記ふ分明謂佐夜氣志とあ体是分明字は意ふて。明なる意なり。天照大御神の。岩屋戸を出給ひて。世間のさやかふ明けく成きる由なり。と云る此說信ふ然る事ふて。阿那と云ふ發語ふ体ふても明は意とを知らまゝ。然るを師を記傳ふも右の聞書ふも竹葉のそゝぎてさやさやと云ることあり。篠は葉もゝ山もさやふなど古ゝゝり用ひ來れぞも發語の阿那きおえば神樂也ふサアくくサヽ昔ハ神樂はとき言しなりと言れしを佐夜邪佐夜加などを哥ふも詠ことふいのふしてゝ心著れざりし。かくて發語の阿那きおえ安と言ましは疑ふべき

注を信じて疑ふまじき古語を疑はまとるふぞふりゝる。ちて阿那於茂志呂を。神等は御面は炳焉く見え多体を歡べる詞。古の阿那佐夜憇を。世間の分明ふふれる字喜ばるるふまを。共ふ明なる由ふはあまど。彼を神等の面を云ひ。此は廣く世間ふの〻る詞ふ卍〻卍。○飫憇を。まを師云。古語拾遺ふ。以飫憇木葉爲手草と有て。飫憇振其葉之調也。と云るふと疑はし。神樂歌。古本ふ。於介と唱るふとを。處〻ふ見え多まを。此言を古傳ふる法し。然れぞも此を木名とせるを心得ず。ちる木を。古も今もいはど聞ず。或說ふ。賢木ありとも。檜ふ卍とも云へど。之れ推量りの妄說ふ。其證ふし。又木葉を振音のオケを鳴べき謂ふし。ち

きて此を木名とするて。かの小竹葉の音れ佐くを已紛れ故る非説あるばし。凡て同処ふ云る阿波礼於茂志呂多能志あどの説も。こゝ古言の意ふ非ず。やゝ後人の附會れるを辨へ必ふて記せる物ふり。○今云此師説れ中ふ阿波礼れ注を。非と云れたて然ることふゞら於茂志呂多能志の注て。然も有まじき由て上ふ云りれ。故思ふ於介とて上ふ見え為ふ汗氣のおをを神樂ふかく唱へしを。木名を誤まるふるばし。佐夜憩ふ竹葉之音也と云るて。さや〳〵と鳴ふ声を已出為る言ふれば。けも有ばし。を有已。古本催馬楽ふ。オケ。オケヤ。アハレ。ハレ。ソヨヤ。ソヨ。サ。サヤ。ふど云言も見也。ふをく考ふばし。○後按ふ神樂譜ふ。その舞を本末ふて稱美る詞ふ。阿知女於介。阿知女於介と云ふ我。舊説ふ。阿知女て。宇受賣と云こをふりと説るて。然る言ふをを。於介てふ詞を説得ばるを。伴信友

ゞ考ゞ。古事記ふ意祁都命とるを。日本紀ふ。姥津命と。已。伊呂波字類抄ゞ。獲をオケザルと訓為るを思ふふ。阿知女て。宇受賣と云言ふて。宇受賣獲を云て。稱美為る詞ふふゞ。宇受賣於介を云ひて。埋置けと云ふ如く。聞也る故ふ。阿知女と云替と皆ふらむを云り。此説然ふばし。敎子ふる。越後国人糊口英哲云く。我ゞ越後ふて風俗歌うあひて。舞踊りふどるを。ヂンクヲドリと云已。此て隣国ふも有ゞて。誰もをく知る事ふり。然るふ其上手ふるを称て。オケ。サと云已。其てわゞ郷のをて。柏寄ふをバ。柏寄オケサといひ。三條ふるて。三條オケサ。新潟れるをて。新潟オケサを云已。其風情は少ゞ異。已ふをども。上手をふむふ意て同じ。かくて此オケサと云ふこを。甚いぶゞしく。人ゞ問ふふ。誰も其言義を知ま為ふ者ふし。然るを今師説を承賜てるふ彼。踊ま る状の。を可笑く宮風とふゞ。宇受賣命の御有状ふ似とり。と美

る言れりとて。始めて思ひ得侍り畏と云ふ。これ信ふ古言の遺きたるばし。○大直會は。大直り饗あるばし。然ては是時。大御神の隱坐て。世中常闇なきたふ依て。神等の愁惑ひれむ事を。上ふ云へるが如くれ為を。今かく出坐て。世中再ぶ明らけく。愛とく成ぬまぢ。神く手を伸を歌ひ舞ひ。悅合ひ給ひれむ事も。上ふ云ふるが如し。世中直ぴて明られく。本の如く成畏る。大ぶたふ事の極みぶれぢ。神等互ふ悅び給ひて。大御神ぢ大御前ふ。殊さらふ。種くれ物奉ぴ。各く自らも祝ひ給ふるぶたふ為れきば。宗よも。大直ぴ饗と云ばきぶぴ。此を例と去て。大御神の大宮ハ更ふも申さば。何処ふ於ても。神事うたむしく仕へ奉り竟とらむ後ふも。其献物ぶど下し

賜ハぴ。誰もく悅びの酒宴ぶど為るを。直會と云ふぢ。此時の大御古事ふ效へたぶぴ。

於是八百萬神共議而。於速須佐之男命。科千座置戸出祓具。令拔髮須及手足爪而。以手爪爲手端吉棄物。以足爪爲足

端凶棄物而。以唾爲自和幣。以
涎爲青和幣。乃使天兒屋根命。
宣其解除出太諄辭而。割天小
菅拂而。令祓竟。八百萬神等。嘖
速須佐出男命而。汝所行甚惡

也。故勿住天上。亦勿住葦原中
國。宜急適底根國云而。乃共神
逐逐降矣。世人慎收己爪者。此
其緣也。

共議而乞師說ふ。おほ天照大御神。はと高皇產靈神の
命を受て爲る非ず。神たち集て議ひ給ふあひ其を深き

所以ぞ有りけむ。書紀・古語拾遺ともに其の旨も同じ。〜されど大御恥を已出ばらむ其由下ふ云
ばは古ゑた産靈神は太を見て辨ふばし。○科千座置戸之祓具。古事記ふた。あぐ
已、書紀本書、古語拾遺も同じ。言足らば。故今ハ書
紀第二、一書ふ責其祓具とあるふ依て、祓具字を補ふ。
科字は、書紀ふ従ふ已。師説ふ凡そ波良比ふ二つの已。其一つは。伊邪那
岐大神の。阿波岐原ふ禊祓ふ如し。一は此の解除ふ如し。
是罪犯ある人ふ科せて。物を出ふ贖はるふ已。かくまで。
其事も意も。二つ別ふるふ似ぬれど。本は一つ。ゆ。履中紀ふ。
車持君ふ罪有て。負惡解除善解除而出於長渚崎令祓禊
とあるを以見まで犯ある者の波良比も。水邊ふ出て禊

祓ける已。是罪犯も穢も同じくまで。ゆ。大祓詞ふ。伴男能
八十伴男乎始氏。官〜ふ仕奉留人等乃。過犯家牟雜〜罪
乎。今年六月晦之大祓爾。祓給清給云〜。速川能瀬坐須瀬
織津比咩止云神。大海原爾持出奈武云〜。四国ト部等。大
川道爾持退出氏。祓却止宣。此文を思ふばし。罪犯を解除
ふも。穢汚を清むる禊と全同じ。穢は即罪ふり。罪は即穢
の段ふ云ると。併考べし。まと穢も通はして。罪とは
云るふと。仲哀巻国之大祓の所ふ。委くいふべし。ちて
罪ふ犯ふも穢ふ犯ふも。其重ち輕さふ隨て。同く波良閉
ばなは。上代の法ふ已。然るを漢国の制をれみ。專らひ
たしハ。何事もかたりて。此の波良閉の
法も。廃きぬき故る外已。然たふきど。中昔までも神事

ふ付ある古をふた。猶此法を用ひらきて。大上中下品く
れ祓ふの巳しこを。古書どもふ見も。そは仲哀巻。国之大祓
けて其祓具を出さゝむる事ゝ。今考るふ。二ッ義ふの巳。一ッふ
た。其祓ふ用ふる色くれ物を科せて。出さしむるふゆ。祓具
と書きとる。具字を思ふばし。まゝ以唾爲白和幣云くとあはも。祓ふ用
ゝ物ふ取きゝ巳。はと雄畧巻ふ。齒田根命罪ふの巳て。以馬八
匹。大刀八口祓除罪過とふの巳。馬大刀を祓ふ用ることも。大祓詞ふ。高天原尓耳振立
聞物止。馬牽立氏を見え。神祇令ふも。上祓刀とふのゆ。此外
古書どもふ見も。抑馬を用ふ所以ゝ。耳振立聞物止と有
如く。神とちの。其祓字速ふ聞召受よと云意ふるふを。上
文ふ云く。掻別氏所聞食武と。ふの聞るを合せて知らはゝ。此ふ
准へて思ふ。太刀ゝ。罪穢を断絶意ふ用ふ。ふや。此外用ふ
る種くの物も。其名まとハ其形ふのはひゝ。そふの物ゝ用ふ

どふ就て。意を取
こと多ふるばし。まと延暦廿年五月の大政官符後紀類聚三代
格。令集解ふ
どふ出ゝ。ふ。定准犯科祓例事。一ッ大祓料物廿八種云く。
一ッ上祓料物廿六種云く。一ッ中祓料物廿二種云く。一ッ下祓
料物廿二種云くとふる。そふの種く物とふ祓の料物ふて。
罪穢の重軽ふはゝ。ふ科ゝ品ふるを以て。思ひ定む
ばし。今云。此事ふふ大祓詞再釈ふ。委く注を併せ考べし。一ッふた。彼阿波岐原の禊
祓の時ふ。御身ふ著ある物等を。盡ふ投棄給へゆし如く
ふ。罪犯ふる者も。身ゝ穢とはふまゞ。其身ふ所有物も。皆
穢ふはを。拂ひ棄る意ふて出ゝ。外巳。故後世まで。祓ふ
用る種く物を。終ふみふ水ふ流し却外巳。ふふ下ふ云べ
し。かくまゞ祓

具を科せる。もと右の二ッの意あるを異国の贖刑と一ッ意より説成は最も古意より非ず孝徳紀より被役之民路頭炊飯於是路頭之家乃謂之曰何故任情炊飯余路強使祓除復有百姓就他借甑炊飯其甑觸物而覆於是甑主乃使祓除如是等類愚俗所染今悉除断勿使復為こまい其祓物を取て已が利おせし事と聞やそれ〳〵世く為て本意を失へる民間のからしおき有々年〇今云国おて為来れる中お自らより祓法お叶ふる事の有るを〳〵聞及べる事あり其ず上代の千座を私記お風れ流き傳を遺きるおぞ有るべき千座を私記お

座者是置物之名也と見えて其祓物を居置物をいふ彩おて女何おてもなるぼし人の座處を久良韋と云も同意おて故書紀位おれ字を書て千を其數おて犯の重さ輕ちの任おて祓も重き輕犯有て祓具も多犯少き品なるを此を極めて重けきず極多きを千とも云おて後世より四座置八座置おど云名目れ遺きるを以て見れず幾座

と云て祓のおを定しおり置を其物を持出て祓ける處を置く意を

て云云ぼれて万葉お置幣とも奴佐於伎とも見え大祓詞

お大中臣天津金木乎本打切末打断氏千座置座爾置足

波志氏とおて師説は金木と書るを借字おて是を祓物を置べき置座お作ぼ料の楮を云おり此金木を置座お置おと聞やきぞも然りを非ず文意は金木を本末切て千座置座を造て置足はしと云れりと見も今思ふお此説まおを云をし置べき種〻物をむ畧て云むば其置座をのみ云ること此と同じ一説お金木を刑具と云るを甚誤おて〇今云世お〻ちむ金木で目を拔く事を云諺おり此を大おぼ物おを心を去きず過う事れおを金木やうの少き物をれ界免て心せざる故お目をはくことあて云へるおきバ加茂翁の金木を置座お造る料の楮を云やはれし信おさる説おて遺きぼおやうの木を金木と云ぼ古言れと乃諺より遺きぼおぼ云ぼし中臣の祝詞天つのお木と有を卜部家さ乃〻〻附會して本を忘きる事おり度會延

住瑞穂抄ニ其字をの〳〵ちを侍ふ濃州のきあり山火金木取と云るを何ぞと思ふに忘れたるか中臣祓ハ本義ニくもし誠ニ神代の言葉鄙ふ残り侍る事是ふて知ぬを侍ふと云ひ

臨時祭式ふ凡祈年月次神今食新嘗等祭料置座木とゐふを置座ニ造る料の木をいふこれ神ふ供奉ちふ料ふりさて置座木を今本ニクラヲオクキと訓ふを誤ふり篤胤云同書ふ楷棚四脚各高四尺ちて其置座ふ四座置八座置と長三尺五寸ともあひ云品ゐひ木工寮式ふ四座置八座置以木爲之長者二尺四寸短者一尺二寸各以八枝爲束名稱八座置長短各以四枝爲束名稱四座置と見也四時祭式斎宮式大嘗祭式おとみも祭料物の中ふ此名見也今考ふ置座を祓物を居置く座ふる故の名ふて四座置八座置も本ハ四座の置物八座の置物と云ふ

ぞふて其置座の數以て云ふるふぞ一種ハ物の名ふ非ず然るをや後ふふひてハ其名のみ古ふて物ハさ乃ハ変ぞりと見也其故ハ式ふ諸祭ハ中ふ載るを見るふ他の雜〻ハ物を居置ぱき料とハ見えぬ別ふ一種ハ物と見えまさ右ふ引る木工寮式ふ云るも物を居置べき物ハ状ふ非ぬ然ぞバ延喜の頃ハ象むのりふりハ置座も木工式ふ云る如くふ小木ふ連ふて結造ぞる物ふ依べし今世ふ安ゐ依柳筥ふどのさ乃ふても推度ら必然ぞむ後世のもかハ置座ふ造るぱき木を束ふてやゞて其を置座と称ひ其木の數を以て彼座の數ふ加へて四座置八座置ぞハ云ふゆハ又もかハ祓ハ詞ふ天津金木乎云〻とゐふも後世の象むかハの置座を造るふとゐふも思ハるぞどふわ然ふは非ぬ彼全文むや後ふ定ふる物ふの詞ハ外古のを用ひとぞ外ハ

ぞゐひちて千座置之祓具と云て有ぱきふ置戸とも云ハもしも未思ひ得ぬ師ハ應神天皇巻ふ伊豆志袁登賣神を兄弟の男ハ云ふる段ふ詛戸と云る言ふ引て此ハ

て其詛事に用ひある種く物を指て詛戸と云へれど此も置座に置く祓具を指て戸とも云あり然きど千座の置物と云むが如しと言きぢ。いのぐ有らむ祓具も書紀に此云波羅閉都母能と訓ひ。○髪須記に切髪と有て髪のおとおく書紀まさ拾遺に抜髪と有て髪はこゝ也。今も彼此合せて取るべし。和名抄に野王案髪和名加美首上長毛也と說文云髭口上鬚也鬚髯頤下毛也髭和名加美豆比介鬚髯和名之毛豆比介ゝ訓ひ此も口は上下の差別あく。ぐ比宜ゆ。鐵胤云須も說文に面毛也と訓ひて。口上頤下頰旁どの差別あく總ての比介を云字あきど此に應へ。○及手足之爪於是とり是まで記を本とし書紀を取て文を補へり。師云及字は乎毋と訓ばし爪和名抄に四聲字苑云爪手足指上甲

和名豆女ゆ有ひ。○以手爪爲手端吉棄物以足爪爲足端凶棄物爪棄物とおも書紀一書に以手爪爲吉爪棄物以足爪爲凶棄物足端凶棄物ゆ訓ひ又一書に責其祓具是以有手端吉とを併せて文を成せり。書紀に手端吉棄此云多那須衞能余之岐羅毗と訓ひ。手端吉棄をのみ註て足端凶棄を言ざるは准へて知らるきぢあり。けて師說に。おは吉凶棄物はいとも善惡祓除の事は本ゆ。然きども善惡祓の事は其儀を記せば物ゆ。如何れるを善いろゆを惡とも知ぐさし。吉招福凶禳禍也と云ふ。後人の例は推當の誤あり。若さらば上に引る車持君の善惡祓除はいろに解べきぞ。犯ある人の爲に福を招くおと有べきかは右に引る延曆廿年は官符は中ふも承前神事有犯科祓贖罪善惡二祓重科一人云くと訓るも車持君は同じ。けてかく手足の爪ゆ拔るも祓具ゆきど。

上より云る二意を以て解べし。一ツハ此祓も。極て重犯祓
ある故ハ。祓物も極て多く。千座を徵はかきバ須佐之男
命の所有ハ物ハ限ハを取ても。猶足ざる故ハ。其御身ハ
生る髮須爪までを取て。祓の料物ハ用る例ハ。書紀ハ亦以唾
為白和幣以洗為青和幣とも一ツハ。所有ハ物も穢き多
ハは料ある知ばし
きゞ拂ひ棄ハ意例ハの。輕き犯も穢淺き故ハ少ハ物を
出し棄て清まる歟。是も犯重くして。極て深き穢ある也。
所有る物をみあのら棄ても。ある清まはてざる故ハ。
其御身ハ生る物までを。拂ひ棄て清むはあり。ちきバ
棄る物も。みれ穢垢ある故ハ。伎羅毘物といひ。棄物と書

きる物も。此意ある。後世ハ。人形を造て流ても。穢とハ身
體なゞ。きれのら棄て。清なる替る意例ハ。このゝきゞ此須を切り爪を拔
事も。右二意ある。纂疏ハ肉刑之始也とれさまひて。
皆人も刑と心得るハ違べり。刑とも其義異ある
ハの。此師說を本として。今考るハ。手端物。足端物とも。古
語拾遺崇神天皇の御世の事記せる処ハ。手末之調をふ。其の有て。此
を手ハて造きハ物を云ハと聞ハを思ふハ。手足を勞
犯て造れる物のあ。古の雅言ハ。かく分け云へるハて。
其も身ハのら手足を勞犯て造る物も。殊ハ惜み思ふ
あをある。其ら祓物ハ出して。清まはると云義ハて。
手端吉棄物。足端凶棄物と云ハも。ハらじか。手ハ吉といひ。足ハ凶を

云ふて手いあふとく足て卑き物故よりこく言るのみわて餘よ涙き意て有まじくおおも其て男神れらとを足名推女神の方を手名推と云て男神ふけて須佐之男命いやしき方を負せとるをも思ふべし。けて須佐之男命れ所有る物を盡ふ。祓具ふ出さし給ひぎ。おを手末足末の物代として。其爪を拔て出きたまとる由如ふ可し。下文れ以唾爲白和幣云くとふけて後ふ。善祓惡祓といるを以ても然て思れとり。ふを。車持君ふ科せ給る趣て。此の吉棄物。凶棄物ふ由ふりげふ聞ゆまぎを。延曆官符ふ。善惡二祓重科一人とあふを合せ思ふよ。此て事趣異ふゆげふ聞えと。おを熟考ふばし。○以唾爲白和幣。以涙爲青和幣。あて書紀石屋戸段第三の一書を取まり。和名抄ふ。切韻云。唾口中津也。和名豆波岐まと同

抄よ。字書云。涙鼻液也。和名須久波奈とふ。唾て白く。涙てや〳〵青けきバ。かく言ふ。ばし。きて爲とは。白和幣。青和幣の代を爲とふ由如。是まと所有る物の限を取ても。おを足ざる故れおとあ。○乃使天兒屋根命宣其解除之大諄辭而と。此其緣也。と云まて。書紀石屋戸段第三の一書を取まり。其中ふ割拂天小菅を云おを。神樂歌を取まり。其由其処ふいふばし。○宣解除之太諄辭とは。上ふ云ふ如く。此時の禍事て。須佐之男命れ御荒を。起きるふを。其を悉く。豫母都國牙掃却らむおとを。祓戸神とちふ祈白せる諄辭おり。其由下よ委く云を見て知ばし。○割天小菅拂而て。神樂酒

殿歌ふ。也戸久毛能奈可奈留久毛乃奈加止三能安万乃古須介乎佐支波良比以乃利之古止波計不乃比能多女。とあるなり。正ふ此時兒屋命の菅もて祓し給る由を詠るふて。然る古傳の有しふ本紀れはふるおを炳し。故おの歌詞は傳ふ依て。文を成せ巳。大祓詞ふ。天津宮事以氏。大中臣云く。天津菅曽乎。本苅斷。末苅切氏。八針爾取辟氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮と見え。万葉三卷長哥ふ。ゆふ手次のひふふ懸て。天ふ在る左佐羅能小野之七相菅。手ふ取持て比さかとれ。天川原ふ出立て。潔身てましを。まと十五ふ。それ佐保川ふ石ふ生ふ菅根取而ゑぬぬくさ。解除てまし我。れぞ石の巳。祝詞考ふ。此歌どもを引て。古の祓ふた。割ふる菅を手ふ取持て。塵ふぞを拂ふが如き巳ざをせしれ巳。然るに古書どもふ祓物くちく載ある中ふ菅ふ見え不ず。此も祓ふ用ふと云を疑ふ人有べれまと。祓柱。国の郡領以下。戸くより出る物ふ巳。まと式ふ。大祓ふ用ふる物どもをバ。皆挙て。祝詞料の布。短帖までも見えとふふ。詞を書く紙筆をのせざるが如く。菅も祓奉仕る官人。一人の手よとる物ふて。斎て作る物ふもなきバ。其人のみが。うらふ。故ふ挙ざふれり。と解きしも然ふ説ふて。後までも菅を持て拂ひしふを疑ふく。其は天上ふて此時爲ふ故實を用ふふ巳はけり。師説ふ。須宜。須賀と云名くし有て負るうさる故ふ祓。も用るふや。又も清と言れ通ふ故ういおきふまれ。清文意ふ取て用ふふありを巳。ちて小菅と云る小も例の稱言ふて。笠ふもぬふ。

此菅なり。万葉十五ノ哥に、菅根とあるも、たゞ菅にて、根は木根、石根、島根なども云根も同く、添ていふ言なれはり。此を祝詞考に、菅の根と訓みしは非なり。また或人は、菅を根ながら取れるを云かとも云り。あれ猶考べし。ちて同三ノ巻に、七相菅とある名義は、いまだ思ひ得ず。若くは七節か。また十ふの菅こも、七ふ、三ふなどあるは、編目を云と聞ゆれバ、此とは異なるか。但しまた、七ふにも編べき、長高きよし菅と云なるか。割拂とは、割て拂ふとしなり。大祓ノ詞に、菅曾と云るは、其割さる上に名なり。其由は、神武天皇ノ巻、大祓ノ詞の処に委く云べし。○祓竟とは、祓ぎは尽しが云。科千座置戸之祓具と云より、逐降矣まで、凡て祓竟るりけれり。○嘖は、迫も同く、彼天津罪は積を言迫るとしにて、下に武甕槌之男神の、建御名方ノ命を誅方ノ海に迫到るもある迫も、即是にて、此は言遁るべき言なく言

迫めたる由なれば、須佐之男命も遁るべき辭なく窮り畏り給ひけむことゝ、天上に勿住そ、葦原中国にも勿住そと、諸神の迫言がいよ〳〵逐はれ給ふるにて知べし。師云、凡て世年留は、狹むるなり。世麻留は、狹まるにて、自と佗とを云差のみなり。可畏み申し過に似たれども、此神もしかく理に窮り給へば、彼御稜威を震ひ給はむには、いかにゆゝしき禍事の出來なましを。諸神の言理は服ひ、其非を悔坐して、下津国に往坐しぬ。其御心は直く坐まししと想察奉るべし。あれ此神の、其非を悔坐し、御心なれど、可畏けれど、次ノ段段に云を見て思ひ辨べし。○惡也は。古本に無頼とありて、旧くタノモシゲナシ、はたコノモシゲナシなど訓めど、漢文の無頼を、あながちに訓ると聞えて、古言ともおぼえぬ訓ざま故

ふ今は意を得て文を改め故阿志加理と訓べし。玄外をち惡く在といふ義なり。○底根国をは。即下津国。夜見国のことなる由は。上ふ既ふ注り紀。第十二段第十八段なども見るべし。○神逐く降矣は神夜良比夜良比降志伎を訓べし。此は古事記ふ神夜良比尓夜良比賜也とあるふ依て訓ひ書紀ふ逐之此云波羅賦とあるふ波字は師言の如く夜の写誤なるべし。神をは凡て神は上の事ふ多く附云詞ふて。上ふ見也。第十段見べし。夜良布は師說ふ。本夜流を延とは言なり。良布ハ流良比は理と切る。さまバ用意は聊異なるふ似為ひ。ちてかく疊て云例は神集く神祝く神議く神問く神和く神掃くなどは如し。皆上は體語。下は用語なり。今云まと中ふ尓てふ辞を加ても云り。其は神夜良比尓夜良比岐ともあり。伊都之知和伎尓知和伎氏なども此格の言れひ。ちて逐は今俗ふ云追放なるをあひ。ちて後は大祓神事は即此時は故實の隨ふ行ひ給ふ事なるふとは今ちら言はでは如く其は皇美麻命の天降坐ひを紀。天御祖命は此の天津宮事はまふ行ひ給と。御言依し坐るふて。罪穢乃清まはふとは伊邪那岐大御神の禊祓給へふ時ふ生坐る祓戸神等の持失ひ給ふふ事ふ有れふ其は彼神事は紀諸ふ宣聞せ給ふ詞ふ。高天原爾神留坐皇親神漏岐神魯美乃命以氐云く皇御孫之命波豐葦原乃水穂之国乎安国止平久所知食止事依奉伎云く如此依左志奉志四方之国中登大倭日高見

之国乎。安国止定奉氐云く。平氣久所知食武国中爾成出武天之益人等我云く。許く太久乃罪出武如此出波。以上の文意は高天原に神留坐す天津御祖命の皇御孫命を葦原中国を安国と所知食せと御事依し降給へるまゝ大倭国を四方の国中は安国と定奉て坐奉る事を其天降し賜ふ時に安国と所知食さむ国中に成出る天之益人等の過犯す罪の許く太久出あむとらむとは云云せと詔べりをいふ意にて此は天御祖神は御言依しを本にして神武天皇御世に當時の事実を合せて天種子命の綴成る詞あり次くれ詞も古文法に深く心を著て思ひ辨ふべし祝詞考後釈ともに此義を思ひ洩さきと此委き謂由まと此詞は種子命の綴成る詞あることの論ひは神武天皇卷に此詞を本文と為れを彼処に委く云べし瑞穂抄に大祓詞は天種子命の作と云ふ傳あれは云く云るは然る説あり。天津宮事以氐。大中臣天津金木乎。本打切。末打斷氐。千座置座爾置足波志氐。天津菅曽乎。本苅斷末苅切氐。八針爾取辟氐。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。此一節は解除法式を誨賜へる御言にて文意は上件の如き許く太久の罪出さらむは天津宮事を始まゝ祓事の例はまゝ行ひて大中臣其事を独り天津金木に本末打切て千座の置座を造り其座ごとに祓物を置足はして天津菅は本末苅断ち八針に取割きそを以て拂ひ天津祝詞乃太祝詞言を以て祈白せとおゝ其は専と祓戸神等に言告る祝詞なるを見て知べし。如此乃ち此に漏さるこを下に委く論ふを見て知べし。如此乃良波。天津神波云く。国津神波云く。所聞食武如此所聞食氐波。皇御孫命乃朝廷乎始氐。四方国爾波。罪止云布罪波不在止云く。高山之末短山之末與理佐久那太理爾落多支都速川能瀬坐瀬織津比咩止云神。大海原爾持出奈武。如此持出往波荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百

會爾座速秋都比咩止云神持可く呑氐牟如此可く呑氐
波氣吹戸爾坐氣吹戸主止云神根国底国爾氣吹放氐牟
如此氣吹放氐波根国底国爾坐速佐須良比咩止云神持
佐須良比失氐牟如此乃良波と云るなり失氐牟と云る
神国津神の所聞食し受給ひて件事依し給へる祓事を天津
本ゑ返し却り給ふ事狀まで諭給へるかゆとなる文
れ於ぐきを熟讀み熟味ひて大祓の神事を本天御祖命
の御依しけまふ〳〵行給ふ御事ふて罪穢れ清まはさ
ゞた祓戸神とち れ持失ひ給ふとを思ひ辨ふ法し大祓詞ある瀬織津比咩を即禍津日神速秋津比咩を即伊豆能賣神気吹戸主ハ即直毘神を坐ひこと上第九四段ゑ見えさるごとしちて祓戸神四柱の中ゑ瀬織津比咩氣吹戸主

は禍津日神直毘神の亦名とを申せども上九四段ゑ云
はゑ如く其本體を大御神と須佐之男命ゑ屬て天生と夜
見とゑ分ゑ坐ゑを祓戸ゑ坐して罪穢を失ひ給ぬ去ゞ
はまさ其幸魂の活用ゑ坐ま故ゑ此亦名を實は祓戸
ふて功をおし給ふ御靈を申ゑ御名ゑおむ有れはゑ故大祓詞
り此御名を挙さるれり ちて此時れ禍事を禍津日神の穢を惡み給
ふ御荒びを起ゑはゑるを祓事ゑを起て須佐之男命
れ諸神の噴ゑ服し坐しを やゞて禍津日神れ御心の和
み坐るよて是即かれ祓物ゑ負せて流し却る罪穢をま
於此神れ受取ゑ乃ふ理れり其を禍事を起れと滅れと表裏の違ひおるが如くお

ども。是そ天御祖神の始給へる祓かくて此神。終ふた
の主意ゐて。深く妙ある謂あるけり。
須佐之男命と共ゐ。根国ゐ往坐しぬ。此由第七十九段
し。罪穢を先受取ゑ乃ふ幸魂。瀬織津比咩神ゑ本謂ゑは
ゐ。永く祓戸を掌して。其功を外し給ふ故ゐ。太祓詞
ゐ。先此神の。大海原ゐ持出給ふ曲を云るゐ。但し其や
祖神ゑ御言依ゑ傳ゑること。ちて国土ゑ起る禍事罪穢
上ゐ委く辨へゑるが如し。
ゑ本因ゑ大凡を思ふゐ。五ゑ別ゐ。一ふゑ。禍津日神ゑ
本體ゑ。夜見国ゐ往坐ぬ。上第二十七段ゐ云ゑ如く其御霊
は。ゐ国土ゐ充満ゑれど。穢ゐ。ゑて。忽ゐ荒び給ふ禍
事。二ふゑ。此神の徳は。いとも太ゑゐ廣く坐ませども。實

はかの荒御魂ゐ坐ゑ故ゐ。好き御意を以て爲給ふこを
も。自然ゐ荒くゐく。そゑ上件須佐之男命の御荒びの状
を熟思ふべし。ゐて惡き御心ゐて。
為給へるゐゑ非ざるをや。且其大きく廣き御功ゑ好事ゐ。いゐぎ來
ゐ惡事。其は韓国島ゐ金銀ありとて。皇美麻命ゐ寄給へ
るゑ廣き御恵ゐを。韓王ゐ畏みの餘りゐ種く
ゑ物を貢れゐ中ゐ国ゑ害と。三ふゑ。伊邪那岐命ゑ脱棄
ゐる事も多きゐど是れり。
給ふゐ穢物ゐ因て。生れる神等ゑ爲ゑ禍事。此事ゑ上第
とちの生れる処。まと第四十三段。万物之
妖。とゐゐ処ゐどゐ云るを。合せ考ふべし。四ふゑ。火神の。
穢を惡ゑ乃ふ御心をゐ起ゑ給ふ災事。ゐは第十八段。豫
云るを。合せ考ふべし。五ふゑは。餘諸神。ちゑ崇の禍事ゐどゐ。
善神とちゐ。ゐふさゑ所思食ゑ事ゑ有
きゑ。怒りゐて禍をゐし給ふこと。第ゑ七段荒御魂ゑ処ゐ

委くく云るを合せ考ふて曉ふべし。世ふ有ゆる禍事は本は。大凡此五柱ふ漏ふ〳〵おそをく所思ふ。よく思ひ深くけてかく種くは別ふのきども祓事よ依ては。皆解除るばき禍事ども。其は何よまれ。禍事ハやがて罪穢ふて。穢は豫美国ふ屬く理ある故ふ。伊邪那岐命の。穢を惡み給ふ御靈よを。て生坐ふ。瀬織津比咩神は。其を受持ふ。御自らふ係ふ係ら。撰びおく。先受取て。豫毋都国は道筋ふる。大海原よ持出給ふ。おき此神は。解除よ功を爲し給ふ狀よ。有ふ。師説と異あり。大祓詞後釈を合せ考ふべし。けて祓を行ひて。罪穢を清免流去は。豫美国よ逐ひ却る所爲ふ故ふ。穢を惡む

此神は。先かく持出ふ。万ひて。けて穢を清給ふ御靈の神。速開津比咩。禍を直し給ふ御靈の神。氣吹戸主。さし次て持送て。速佐須良比咩。其を根国ふ持ち去らひ失ひ給ふ。おきぞ解除は大旨よて。天御祖命の御傳へ坐ふ趣ふて。今おの事を為むりは。祓具は。佐須良比咩神は如く。ヒゲ身は。須佐之男命は如しと心得べし。このくて此四柱ふ功。各く異ふは坐ませども。おの深く思ふむ。此神とち誰も餘三柱の御靈をも兼持給ひて。互ふ御靈幸ひて。祓の功を相成し給ふ中ふ。直毘神は。伊邪那岐命の禍を直さむと欲して。生る神ある故ふ。おは御功は殊ふ大如く。廣くいふ時は。早川の瀬よ流を出るとゆ。根国

ゑ到ぬてさけらひ失るはで。都て此神は御靈ゑ非ざる事ゑきハ。更ゑも言は密。言もて行けど。始め八百万神とちは。神集くて議ませゑをめ。祓竟とゑまで。始終密ぢて。此神は御靈ゑをゑ事ゑゑむ有り。ゑゑ神武天皇巻ゑ委く云れバ。此ゑい要と云ふる事は大意を注のこれり。ちて速佐須良比咲神を。佐須良比とも。流離字の意ゑるこゑ。既ゑ云りき。其生坐の處ゑ云ゑは如く。殊ゑ深き御鼻は穢は。流離出る時ゑ生坐して。其由を御名ゑ負坐し。實も須佐之男命は分魂ゑ坐まし。かく罪穢を。持佐須良比失ひ給ふ御功ゑゑと。須佐之男命は。此時逐も給ゑきど。年久ちく此国ゑ坐まして。種くの功を立給ハ。ると我合せて

按ふり。須佐之男命は犯し給へる罪をむ。悉く此神は負持て。此時直ゑ。根国ゑ佐須良はれ往坐るゑゑは。須佐之男命は負給ふ。き御名れる。此神は負坐るは。幽き契ゑる事ゑりけど。上第九七段ゑ此神者。と云ときハ。須佐之男命は負給ふ。き御名れる。此神は負坐るは。幽き契ゑる事ゑりけど。上第九七段ゑ此神者。與速須佐之男命。合力而座神也。とゑゑは處ゑ云ゑめし說ども我。此ゑ思ひ合せて。此妙ゑは理。曉ゑは。ゑゑ。のゑ。言ゑは云ゑ得ゑのゑ。さて後世ゑ罪ゑの人を遠き処へ迂し却るを佐須良ふと云む。此古言の遺ゑゑは外るべし。万葉三巻長歌ゑ。天有左佐羅能小野之。七相菅手取持而。久堅乃天川原爾出立而潔身而麻之乎。とゑゑは。天上は故事。思ひて詠るゑゑは

を炳れまで佐ゝ羅之小野とた。此時佐須良比事を爲さ
ゝ野と云意れ名ゝて。此野の菅を取て解除事を爲て。ち
て天河原ゝ出立ゝ禊を爲ゝといふ古傳れ遺まる本
ゝきて。詠ゝるゝ。まゝ十六卷の哥ゝ天尓有哉神楽良能小野ゝ茅草苅婆可尓鶏佐乎立毛と詠ゝた。ゝ小野と云べき序詞ゝ天上ゝる佐良之を云ゝるゝて故実ゝ違ゝり。此哥ゝ依て。佐ゝ良之小野とれ云べて野を云ゝるゝ。天有ゝいひ菅ゝ取て潔身ゝる由を云ゝる。ゝて。此時れ故事ゝ本ゝれる名ゝる事を思ひ決むべし。又按ゝ。ゝ已竹をゝ。ゝらと云ゝ。言の本ゝて。名義れゝ。ゝ。ゝと鳴ゝり云ひ。其ゝ以て追ふ故ゝ。ゝさにゝらふと云ゝや。彼ゝのゝ。ゝを。ゝをせ。ち。ゝ。ゝを云ゝふ。ち。ゝも。進ゝる意れ。ち。ゝて右長歌ゝ。天河原爾出立而云ゝく。ゝを云ゝる天川原ゝ決ゝて彼安河原のゝとゝて。此河原ゝて禊を爲ゝ。彼千座置戸れ祓物ゝ。此川ゝ流ゝ。ゝ已れゝむゝ。其思ひ合ゝべき事ゝも。久那太理の処ゝ。委く云ふを見るべし。或人云。天川ゝ。安河と云ゝと。ゝ。ゝ見ゝる。何の書ゝ。ゝれゝと云ゝ已。ち。ゝて。ゝ。ち。川原ゝ出て潔身ゝと。ゝた。伊邪那岐命れ橘之小戸ゝて。禊祓ゝ給ゝ。ゝる故實ゝ依ゝ。ゝ御事ゝ已れゝむゝゝゝ。云ゝ。更ゝめ。かくて。此国の禊祓ゝ。川原ゝ出て行ひ。それ祓物ゝ。大川道ゝ流ゝゝゝと。ゝた。大祓詞ゝ。天津宮事以氏とのきゝ。天上れ故実ゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ち。ゝて禊祓の事ゝは。上件祓戸神ゝち。四柱の御霊ゝ賴て。祓ひ清むゝる事ゝ。ゝゝ。上ゝ使天兒屋根命宣解除之太諄辭とのゝ諄辭ゝた。必ゝれ四柱神ゝ禱白ゝ詞ゝ已れゝむゝ事を炳焉し。かくて。ゝゝ。後の大祓れ神事も。此の天津宮事を以て爲ゝる事ゝ

まだ必此神とちは祈白に天津詔詞のおくてた有まじき理ありるよ其太祝詞れ傳たらざるは甚も歎かれたれ悲きことふ已然ほ多世れ學者とちれ彼大祓詞をやゞて神ふ白に詞れゆと思ひ居るたいと麁れ已かし其た彼詞を熟くよ讀考ほよ上れ小註よもゝ如く云る如く彼れ皇美麻命の天降坐にと知天御祖神の御言以て葦原中国ふ所らもほ天之益人等ふ過犯せほ罪穢所らむ時大祓事を爲て解除却るほき式法天津宮事以氏と云なり太祝詞乎宣礼と云ほまでよをくまと其解除乃太祝詞を天津神心を著て思ひ辨ふべし国津神祓戸神とちれ所聞食し受給ひて罪穢を却ひ失

ひ給ふ狀をも御言依し誨給へる事のまゝ此事を爲て百官人及四方国の人民れ罪穢を天皇命れ祓清免給ふ由を集侍れる人くふ宣聞に詞よれ非ざきばふ已操返し彼詞の全文をあまあくび合せ考るふ神の御前ふ白に格れ辞とれ言ざふ無して多く解除し給ふ故由為方まと罪穢の清まる狀ふ無どを天津神の依給へる御言ふ言を加へて記されほよて集侍れる人くよ宣聞せ給ふ詞ふるふと更ふ疑ふき趣れるなや其を委く言ち最初の文よ天皇朝廷尓仕奉留比礼挂伴男手繦挂伴男靫負伴男劔佩伴男伴男能八十伴男乎始氏官くふ仕奉留人等乃過犯家年雜くふ罪乎大祓尓祓給比清給事乎諸聞食止宣と見え終文ふも大祓尓祓給比清給事乎諸聞食止宣とありて貞觀儀式よ称聞食刀祢皆称唯とあるを思ふべし但も餘れ祝詞ども乃其を神ふ白し称く也参集る人等よも聞必き由を宣ことも乃まむ其らと同も趣ふ思ふ人必有法

国立公文書館
National Archives of Japan

れをど右のとぐひは白に祝詞はた其くの神は白に例の言れ有て紛るゝ事あきを彼詞ゐを曾て然る辞れ無れば神ゐ白に詞あらぬこと疑あきもれそ是ゐ就て猶按ふは朝野群載ゐ彼詞を中臣祭文とて挙あるをあかしこ文の異あるも有ゲ中ゐ式はた自今日始氏罪止云罪波不在止高天原尓耳振立氏聞物止馬牽立氏と在る文を自今以後遺罪止云罪咎止云咎ハ不有止祓給比清給事祓戸乃八百万乃御神達八佐乎志加乃御耳乎振立天聞食止申と在る此れ師も加茂翁も言れ如く中昔の人乃古れ事をも意を母ちで謾ゐ詞を替とるもれあることを論あきぬれのら其れ式ある詞を人人は宣聞ぬ詞を神ゐ白に詞ゐ云ぬとは心著ゐ人れ此詞をやゲて神ゐ白ぬ詞はせむとて替とは事とぞ思れる〳〵ゐ不此外はも中臣祓抄をて在る本ともゐもかく状は神ゐ白に詞のおと云るも多〳〵きどこれ後ゐ加ゐとる文ゐはおと決し。かゝきは。祓戸神とちゐ白に太祝詞れ別は有れむを。式はた載漏きれゐはゐるおと疑ゐし。其れ彼大祓詞ゐ。大中臣云〳〵。天津

祝詞乃太祝詞事乎宣禮と在の巳て。如此久乃良波と承ゐるゐ。熟く心を著て思ひ辨ふ法し神ゐ白に祝詞を。別は依し賜ゐゆしゲ漏と法ゐるおを更は疑ゐ知もれをや。若然らゑとせゞ太祝詞事乎宣禮とを何を宣おとのせむ。如此久乃良波と承と法れ。必上ゐ宣法き祝詞れあ巳て。其を宣竟ゐるを承て言る辭ゐ法ゐ。それ宣べき祝詞の無。我いゐゐせ乎。祝詞考は太祝詞事乎宣礼と在て祝詞を神は告る言ゐり。是れ人の身滌祓れ事ゐをバ。祝詞とハいれゝ。ゐ〳〵詞と在る処乃頭書ゐ或人の言を詞を在るは別ゐ神代をり傳はきる言在るゐらむと云れみ云りさまゞ此ゐ天津祝るれ非ゐりとて其を辨ゐられ。師の後釈ゐも太祝詞事は。卽大祓ゐ中臣の宣る此詞を指せるれり。と解きゐれぞ。共は考れ麁りしゐ巳れ巳考は言きし或人れ誰ゐ

已れむ。既くも心よくき事なむ言かきまる。○或人なむ舊説を泥みて、浮ゞ説を信ざるを、近く譬へて諭ゝら
くを、あるゆざくを呪禁の哥書て、人まおれ体と多、其せを
そこを呪ふべれ趣を、云くれ事して、此哥を誦ばし、かく
誦あらむまを、それ痛速まを瘉らむものぞと言おくゆあ
らむを、使人途まて、其短冊を失ひ、せをきおむゆ已贈れ
るを、受と体人其ををみて、此哥を誦べしとは、即これ消
息の事ぞと、云て、あおざくを取落しあることを、心著で
而らむゞ如し、大祓詞の斧きを、今さら言までも無きど、
も、彼太祝詞言れ外くてを、此せをそこを、心
を平らおを、て熟思べし。ちて其漏あ体祝詞を、天御祖命れ、大御口於
から傳坐るおて。それ太祝詞事乎宣礼、如此乃良波、とを
る文意ををく思ふべし、大御口於ゆら
傳坐体あこと、更
お疑外なものをや。祓戸神あちお。祈白於詞お体を。神事
れ多ゆる中お。禊祓れ神事ぞの已重れを無きぞ。天津祝
詞の多お体中お。此祝詞ぞゆり重きは無く。天上おて。此

時兒屋根命れ宣給へ体辭も。其おるばく所思るお。餘の
祝詞を。悉く傳ハきを体中お。是のみ漏と体事を。悲しき事
れ極お体故ゆ。年頃いあく歎き思ゆ已しを。猶深く考る
お。此を別お重き詞お体所由お依て。式よをわざと載漏
さきたを体て。然る例を。餘の詞よもあり。其ハ中臣家お
第百四十三段お云るを見べし。
は。必ふきを傳られあらむと所思あ已。篤胤密よ其詞お
るべきを得て。彼
此異おる処まを誤きる言おどを。校正しを体も有れど。
此を別お所由ゆりて。式よを載泄されあるまやとを。
思はるまぞ。此は記さむを。容易げお体故ゆ。此
詞のみハ姑く祕藏きて。傳ふべき人を待おむ。ちて大
祓詞を上お引る歌共おを已て。解除事れ故實を想ふお。
体於千座の置座を祓物を置足をして。祓戸神あちを手

向け。菅れ本末苅切て。其を手ふ執ア。彼太祝詞言を告て。罪穢を祓清米給れむとやを祝くて。菅を以て拂ひ却る事我爲て。然ゑは事れ由縁を集侍きは人くふ宣聞せ。その宣聞ば詞を。即大祓詞ある。ちて河原ふ出て身滌して。終ること上ふ委く論るゲ如し。ふれ其祓物を悉く大川道ふ持出て流し棄は。是ぞ古へれ趣ふアけは。後よれ漸み其趣も替きるを其れ儀式をり次く。後書り見えさはゲ如し。おを解除事の ことハ。神武天皇卷大祓詞の 処よ。委く云ふを見るば法し。

○門人。北原信質。市岡殷政。岩崎長世等いふ。はきれ古史傳の。十二巻といふ巻を。かく木ふ上せて。師の御もとふ奉出せはを。みぬの囮れ道の中。中津川れうはやぢふ吉

ゑる。河村秀豊と。同所のくきしふる。馬嶋穀生とはのらひてふア。かくて九の巻よア。ふれ十二巻ふいあるまで。合せて四巻を。第三祓ふあるは一袠ゑに。長世信質等さらふ云ふ。此四巻一書衣は妥。もはらこの中津川ふて成功ゑ。

○阿那米傳多。

彫工　木邨房義刻

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目

塾藏版

○古史成文　神代部　三卷
○古史傳　自初卷至廿四卷　袂刻成
○古史徵　神代部六冊　開題記五冊　十一卷
○古史本辭經　五十音義訣　四卷
○神代系圖　拓本箱入　一帖
○同　小折本　一帖
○同　掛軸料　一枚
○靈能眞柱　二卷
○神拜詞記　一帖
○玉多須喜　二帙　十卷
○太元圖說　石摺　一幅
○學神号　同　一幅
○万聲大紡譜　一幅
○弘仁歷運記考　二卷
○神字日文傳　二卷
○疑字篇　日文傳附錄　一卷
○皇國度制考　二卷
○祝詞正訓　二卷
○大祓詞正訓　折本　一帖
○天津祝詞考　一卷
○古道大意　講本　二卷
○靜乃石屋　同　二卷
○古史年歷編畧　一帖
○童蒙入學門　一卷
○入學問答　附著述書目　一卷
○牛頭天王曆神辨　一卷
○醫宗仲景考　一卷
○古今妖魅考　三卷

○刻成書目　○全

○鬼神新論　一卷
○悟道辨　講本　二卷
○大道或問　一卷
○立言文　同　一幅
○赤縣歷代尺圖　一枚
○赤縣太古傳成文　一卷
○宮比神御傳記　一卷
○神字彙　一卷
○神德略述頌　一卷
○喪儀略　一卷
○祭典略　一卷
○神事略式　一卷
○春秋命歷序考　二卷
○伊吹於呂志　同　二卷
○木匠祖神号　石搨　一幅
○武道祖神号　同　一幅
○荷田翁啓文　一卷
○出定笑語　三卷
○天滿宮御傳記略　二卷
○古學二千文　同読例　一卷
○古道訓蒙頌　一卷
○葬事略記　一卷
○祭文例　一卷
○校訂古語拾遺　一卷
○皇典文彙　三卷
○俗神道辨　同　四卷
○德行式　同　一幅
○豎祖神号　同　一幅
○太界古易成文　一卷
○同　附錄　三卷
○日女島考　一卷
○草木撰種錄　一枚
○ヰ古要略　一卷
○西籍慨論　講本　三卷
○千字文　一卷
○石搨類　數種

国立公文書館
National Archives of Japan